

8. 「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の第3四半期(14世紀後半～15世紀後半)

8.1 重金主義と重商主義

3世紀頃まで、帝国Aと帝国Bの大きなちがいは公用語のちがいであった。だが「グレート・リセット」後、大きなちがいが国教のちがいになる。他方、4世紀後半から異なる財貨の交換(ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換等)がはじまり、物品貨幣(穀物や家畜、木材等)と財貨の交換も増大する。そして土地と奴隷が財産化(あるいは財貨と同類化)し、貨幣経済が誕生する。

その後8世紀後半から銀貨が秤量貨幣化し、世界通貨になる。世界通貨＝銀が様々な物産を商品化し、12世紀後半頃までに物品貨幣が消滅して商品経済(商品Aを消費して商品Bを生産する位相構造)が誕生した。とはいえ、筆者の認識では、12世紀後半～14世紀後半に商品経済が深化した地域は北海沿岸の商工都市とイタリア北西部のフィレンツェやミラノだけである。すなわち、「広義の近代」の出現期前半は「広義の中世」の成熟期に重畳して生じた地理的例外であった。

したがって、前章と前々章で「広義の近代」の出現期を論じた部分はわずかである。前章と前々章は内容の大部分が「広義の中世」の成熟期である。

貨幣経済の下では、たとえ商人が仲介しても売り手と買い手の関係＝交換関係は対称的である。しかし商品経済の下で関係の対称性がなくなる。

「広義の近代」の出現期後半(14世紀後半～16世紀後半)に、商品経済が深化して拡大し、財貨に商品的側面が生じる。そのため「改鑄」も財貨鑄造施設の仕事になる。他方、大航海時代がはじまり、中南米で産出する多量の銀が世界に流出して重金主義が誕生する。

ユーラシア大陸西部＝ヨーロッパでは、重金主義の下で通貨法が制定され、商品経済がグローバル化した。その後重商主義が誕生し、旧世界(ユーラシア大陸やアフリカ大陸)の経済空間と新世界(北米大陸や中南米大陸)の経済空間が結合して代数構造＝市場経済が生成する。そして「広義の近代」の突破期がはじまるが、ユーラシア大陸東部では重金主義や重商主義に相当する「経済」が誕生していない。それどころか、中国(明朝後半と清朝前半の中国)の莫大な銀需要がスペイン等ヨーロッパ諸国の重金主義経済を支える。

(重金主義が衰退した原因は、日本が産出する多量の銀である、と論じるデニス・フリンのような歴史家がいる。その場合、世界史＝グローバル・ヒストリーにおける日本の位置付けは「新世界」になるが、旧世界と新世界を区別する思考作業を行っていない政治学者や社会学者たちが不可解な日本特殊論を論じている。筆者は、彼らの言説に底の浅さを感じる。当時の日本に特異性があったとすれば、中国から輸入した律令制が根付かなかったことであり、皇朝十二銭が普及しなかったことである。あきらかに、「広義の中世」の日本は中国の亜周辺で、そのため「広義の近代」の日本が新世界に属する場面が生じた)

重金主義経済が旧世界と新世界の非対称性を活用し、重商主義経済がユーラシア大陸東西の非対称性を活用した。あるいは、ポルトガルやスペインとイギリスやオランダのちがいが重金主義と重商主義のちがいを生じた。しかし重視すべきことは、重金主義経済と重商主義経済がはじまる前にポルトガルやスペインとイギリスやオランダのちがいが生じていた、ということである。本章で「ちがい」が生じた原因＝初期産業革命等を論じる。重金主義と重商主義のちがいについては、次章以降で論じる(コラム52)。

コラム52: 新世界と旧世界

グローバル・ヒストリーの専門家たちは、世界(地球)を旧世界と新世界に分断してグローバリゼーションを考察する場合が多い。この「分断」は、グローバリゼーションの進展を考察する上で必要な思考作業である。

経済空間がグローバル化するまで、中南米大陸や北米大陸でサトウキビや小麦、綿花を栽培する場面はなかったし、ユーラシア大陸やアフリカ大陸でトウモロコシやジャガイモを栽培する場面もなかった。とはいえ、重要なことは、ユーラシア大陸東部＝アジアでは、ヨーロッパの船舶が航行する前から海上交易が行われていたが、中南米大陸や北米大陸では行われていなかった、ということである。このちがいが旧世界と新世界の「ちがい」であり、重商主義と重金主義のちがいにつながる。

中国やインド、東南アジア諸国は旧世界に属するが、旧世界に属していた国家や地域の一部が新世界に移動したと想定しなければ、グローバリゼーションの進展を論証できない場合がある。日本はその典型である。皇朝十二銭が普及しなかった日本で、物品貨幣が存続していた。したがって、日本は多量の銀や銅を輸出できたが、「新世界」に移動していたとも言える。

8.2 ヘンリー5世のフランス支配

1369年、ブルゴーニュ公フィリップ2世(フランス王シャルル5世の弟)がフランドル地方の家督相続人マルグリットと結婚し、ブルゴーニュ地方の他にフランドル地方とブラバント・エノー地方(概ね現在のベルギー)も彼の所領になる。そして彼の長男ジャンがバイエルン公アルブレヒト1世の娘マルガレーテと結婚し、彼女の弟バイエルン公ヴィルヘルム2世の死後、ゼーラントやフリースラント、ホラント地方(概ね現在のオランダ)を所領化する。すなわち、ブルゴーニュ公家が現在のベルギーとオランダをひとつにまとめ、所領化した。以後、現在のベルギーとオランダを「ネーデルラント」地方と呼ぶ。

農業が盛んなブルゴーニュ地方と商工業や漁業が盛んなネーデルラント地方を所領化したブルゴーニュ公家は、ヴァロワ王家を凌駕する王族勢力に台頭するが、苦痛の種も大きくなる。すでに述べたが、13世紀にサヴォイア伯国が分裂した後、ブルゴーニュ地方の約半分が神聖ローマ帝国の版図になった。また、フランドル地方を除くネーデルラントも概ね神聖ローマ帝国の版図である。すなわち、ブルゴーニュ公は両君(フランス王と神聖ローマ皇帝)に仕える封建諸侯である。ブルゴーニュ公家は、両君の顔色を伺いながら所領を経営しなければならない。

(フランスは、フィリップ4世の代に中央集権化した。アキテーヌとブルターニュ、ブルゴーニュとフランドルは例外である。英仏百年戦争が終結するまで、アキテーヌ地方はイングランド領でブルターニュ地方は半独立状態であった。ブルターニュ地方は、住民の大多数がケルト系ブリトン人である。ブルゴーニュ地方とフランドル地方は住民の大多数がドイツ系で、ブルゴーニュ公家はフランス王に臣従しながら神聖ローマ皇帝と親密な関係を築いていた)

1377年、ローマ教皇グレゴリウス11世がアヴィニョンからローマに帰還するという「事件」が勃発した。グレゴリウス11世のローマ帰還は戦争(英仏百年戦争前半)からの避難という一時的なものであったが、彼は翌1378年にローマで死去し、その後ナポリ出身のウルバヌス6世が新ローマ教皇に就任してローマに定住する。そのため、教皇庁をアヴィニョンに戻すことを考えていたフランス人枢機卿たちが教皇選挙の無効を主張し、フランス出身のクレメンス7世を新ローマ教皇＝対立教皇に選出する。

立場上、フランス王シャルル5世はクレメンス7世を支持する。ナポリ女王ジョヴァンナ1世、さらにアラゴン王やカスティーリヤ王、スコットランド王もクレメンス7世を支持した。

だが、自身が死去する直前に、神聖ローマ皇帝カール4世がウルバヌス6世を支持する。そのためカール4世の娘アンを娶っていたイングランド王リチャード2世はウルバヌス6世を支持するしかなかった(とはいえ、彼はフランスとの休戦協定を遵守する)。

カール4世の死後、彼の嫡子ヴェンツェルが神聖ローマ皇帝に即位するが、教皇庁の分裂＝シスマを解消できない。1400年、ヴェンツェルが退位し、ヴィッテルスバッハ家のループレヒトが神聖ローマ皇帝に即位する。そしてウルバヌス6世を支持した。そのためブルゴーニュ公フィリップ2世もウルバヌス6世を支持するしかなかった。

他方、1380年にシャルル5世が死去し、彼の嫡子シャルルがフランス王シャルル6世(在位1380～1422年)に即位する。その後1382年にアンジュー公ルイ1世がイタリア遠征(目的はナポリ王位の篡奪である)に赴くが、1384年に死去する。そして1388年、成人したフランス王シャルル6世が二人の叔父(ブルゴーニュ公フィリップ2世とベリー公ジャン1世)を解任して親政を開始し、彼の弟オルレアン公ルイが台頭する。

1392年、シャルル6世が精神疾患に陥り、二人の叔父が復帰するが、オルレアン公ルイも執政の中核＝評議会に残り、年金や交付金の分配その他で二人の叔父と対立した。オルレアン公ルイは、とりわけブルゴーニュ公フィリップ2世を糾弾する(ブルゴーニュ公フィリップ2世にウルバヌス6世を支持したという弱味があった)。

しかし1394年にクレメンス7世が死去し、アラゴン出身のベネディクトゥス13世が対立教皇に就任したため、フランスの司教たちはアヴィニョン教皇庁から離れる。フランス王が神聖ローマ皇帝との対等関係を喪失し、オルレアン公ルイはブルゴーニュ公フィリップ2世を追放できる。しかし1404年、フィリップ2世が死去する。そして彼の長男ジャンがブルゴーニュ公ジャン1世に即位した。

1415年にイングランド王ヘンリー5世が戦争再開を宣言した後、1440年頃まで、英仏百年戦争はイングランドとフランス、ブルゴーニュ公国が三つ巴で戦うが、フィリップ2世の代のブルゴーニュ公国がフランスと戦火を交える場面はなかった。ブルゴーニュ公フィリップ2世は、二人の兄(アンジュー公ルイ1世とベリー公ジャン1世)とともに彼らの長兄シャルル5世を補佐し、シャルル5世の死後、自身が死去するまでフランス王シャルル6世を補佐した。

しかし彼の長男ジャン＝ブルゴーニュ公ジャン1世に父親の面影はない。1405年、シャルル6世が一時回復し、評議会を開催する。他方、ブルゴーニュ公ジャン1世が軍勢を率いてパリに向かう。そしてパリを占領し、国政改革を要求した。ブルゴーニュ公ジャン1世の改革要求は概ね徴税に関するもので、ハンザ商人やフランス商工業者の意向に沿うものであった(すなわち、減税である。先代のシャルル5世は、「税金王」と呼ばれるくらいに様々な税を制定して実施した)。

ベリー公ジャン1世が仲介し、ブルゴーニュ公ジャン1世は叔父の面子を立てて軍を解散する。とはいえ、彼の改革要求は協議事案になった。しかし高等法院が要求を握り潰し、国政の場からブルゴーニュ公ジャン1世を遠ざける。黒幕はオルレアン公ルイである。1407年、怒ったブルゴーニュ公ジャン1世が刺客を

送り、オルレアン公ルイを殺害する。

ブルゴーニュ公ジャン1世の暴挙に温厚なベリー公ジャン1世が激怒した。ベリー公ジャン1世は国政を掌握し、ブルゴーニュ公ジャン1世をパリから追放する。だがシャルル6世は内戦の勃発を憂慮した。1408年、シャルル6世はブルゴーニュ公ジャン1世を赦免する。

とはいえ、ブルゴーニュ公ジャン1世の目的は国政改革、すなわち減税である。宮廷クーデタが勃発し、ブルゴーニュ公ジャン1世が国政を掌握する。そしてベリー公ジャン1世やオルレアン公家の人々を宮廷から追放する。

1410年、ベリー公ジャン1世とオルレアン公家の人々が同盟を結び、ブルゴーニュ公ジャン1世と対峙した。この同盟にアルマニャック伯ベルナール7世も加盟する。彼らは婚姻関係を結び同盟を強固にする。

(アルマニャック伯ベルナール7世はオルレアン公ルイの甥である。そしてシャルル5世に「フランス王の臣下であり家臣である」と述べたアルマニャック伯ジャン1世の孫である。以後、オルレアン公家を支持するグループを「アルマニャック派」と呼び、ブルゴーニュ公家を支持するグループを「ブルゴーニュ派」と呼ぶ)

フランス各地でアルマニャック派とブルゴーニュ派の内戦が勃発した。両派ともイングランドに援軍を要請する場面があったが、イングランド王ヘンリー4世は動かなかつた。しかし1413年、ヘンリー4世が死去し、彼の次男ヘンリーがイングランド王ヘンリー5世に即位する。

1415年、ヘンリー5世は対フランス戦争再開を宣言する。ヘンリー5世率いるイングランド軍がノルマンディー地方のオンフルールに上陸して北フランス各地を襲撃した。その後イングランド軍は帰国の途に就きカレーに向かう。

アルマニャック派と交戦していたブルゴーニュ公ジャン1世も、さすがにイングランド軍の侵攻と略奪を容認できなかったようである。カレーに向かう途中のイングランド軍をブルゴーニュ軍が襲撃する。しかし惨敗した。

(ブルゴーニュ軍がイングランド軍を襲撃した場所はアジャンクールである。約1万名のフランス兵が戦死し、ブルゴーニュ公ジャン1世の二人の弟も戦死するが、イングランド兵の戦死者はわずか25名であったと伝えられている)

翌1416年、ヘンリー5世は神聖ローマ皇帝ジギスムント(1410年にループレヒトが死去し、ハンガリー王ジギスムントが神聖ローマ皇帝に即位していた)とカンタベリー同盟条約を結ぶ。神聖ローマ皇帝との同盟は、ヘンリー5世のフランス征服を正当化した。

他方、ジギスムントはイングランドとフランス両派に講和を呼びかけ、カレーで和平会議を開催する。だが、アルマニャック派とブルゴーニュ派の講和は成立したが、イングランドと両派は半年間の休戦協定を締結しただけであった。

(当時、ジギスムントは後述するコンスタンツ公会議を開催してローマ教皇庁の分裂解消に尽力していた。他方、教皇庁がアヴィニョンからローマに帰還しているというのに、フランス王が神聖ローマ皇帝と対等になることを恐れていた。彼はサヴォイア伯アメデーオ8世に公爵位を与え(すなわち「サヴォイア公国」の開国を認め)てフランスを牽制し、また若いヘンリー5世に多大な期待を寄せた。会議の主催者が誤った認識や邪な考えを持っていたのでは、長期休戦協定など結べない。しかも、会議の直前にベリー公ジャン1世が死去したため、フランス側に長老格の人物がいなかった)

翌1417年、ヘンリー5世率いるイングランド軍が再度オンフルールに上陸し、ノルマンディーの中心都市ルーアンを包囲する。イングランド軍の上陸を知ったブルゴーニュ公ジャン1世は、パリに赴きシャルル6世を保護するが、彼を嫌うシャルル6世の五男シャルルやアルマニャック伯ベルナール7世がパリから離れブルジュで臨時政府を樹立する。

(シャルル6世の長男と次男は夭折した。そして三男ルイが1415年に死去し、四男ジャンが1417年に死去している。したがって、五男シャルル＝王太子シャルルが唯一のフランス王位継承者である。彼は幼少期をアンジュー公ルイ1世の長男ルイ2世の元で過ごし、成人して彼の娘マリーを娶っている)

オンフルール上陸後、ヘンリー5世はブルターニュ公と休戦協定を結んで西方の安全を確保し、シャルル6世と交渉する。しかしイングランド側の要求があまりに過大であったため、不調に終わる。1419年、イングランド軍はルーアンを陥落し、パリに進軍した。

ブルゴーニュ公ジャン1世は、宮廷をパリ近郊のトロワに移し、イングランド軍との戦闘に備えた。そしてアルマニャック派との同盟を試みる。パリとトロワ間にあるモンロー橋でブルゴーニュ公ジャン1世と王大使シャルルの直接的な会談が行われたが、双方の随員間で小競り合いが生じ、王大使シャルル側の随員がジャン1世を殺害してしまう。

ジャン1世殺害の報を得たヘンリー5世は、ブリュッセル(現在のベルギーの首都)でブルゴーニュ公領の執政を担っていたジャン1世の長男フィリップに英仏合邦構想と同盟を提案する。英仏合邦構想の内容は、ヘンリー5世がシャルル6世の娘と結婚してフランスの摂政を担い、シャルル6世の死後、ヘンリー5世の嫡子がフランス王に即位する、というものであった。同盟の内容は、ヘンリー5世はブルゴーニュ公領の内政に干渉しない、またフィリップの妹とヘンリー5世の弟が結婚し、ジャン1世の殺害者とその責任者の処罰に協力する、というものであった。

フィリップは、ブルゴーニュ公フィリップ3世に即位し、地方三部会を開催して協議した後、ヘンリー5世の提案を受け入れる。1420年、トロワで調印(トロワ条約)が行われ、ヘンリー5世とシャルル6世の娘キャサリン(フランス名カトリーヌ)が結婚した。そしてヘンリー5世の弟ベッドフォード公ジョンがパリに常駐して「ランカスター朝フランス領」の執政を担い、フィリップ3世の妹アンヌと結婚する。

ブルゴーニュ公領(以下、「ブルゴーニュ公国」と呼ぶ)は領地の約半分がフランスで残り約半分がドイツ＝神聖ローマ帝国であるが、ブルゴーニュ公家の財力は概ねドイツ領(とりわけネーデルラント地方)に依存していた。だが、ジャン1世に、前章で述べたジギスムント率いるニコポリス十字軍に従軍してオスマン軍の捕虜になるという苦い経験があった。彼はジギスムントを嫌い、ジギスムントが皇帝に即位した後の神聖ローマ帝国に関心を持つ場面がない。ジギスムント即位後、ジャン1世はもっぱらフランスの国政に関心を寄せる。

しかしフィリップ3世は「苦い経験」と無縁である。父親とちがい、彼はフランスの国政にあまり関心がない。他方、黒死病の蔓延と商品経済の深化を認識していた。フィリップ3世は、英仏戦争に勝つことより領民を「食わせる」ことが領主の責務であると考えていたようである。ブルゴーニュ公国への不干渉は望ましいことで、イングランド王がフランス王に即位してくれるほうがむしろありがたい。

トロワ条約を締結した2年後の1422年、ヘンリー5世が34歳の若さで死去し、約2ヶ月後にシャルル6世も死去する。そして、ヘンリー5世とキャサリンの間に誕生した嫡子が生後9ヶ月でイングランド王兼フランス王ヘンリー6世に即位する。だが、そのような「危機」の場面で、フィリップ3世はパリを離れて帰国し、ブリュッセルでブルゴーニュ公国の統治に専念する(彼はヘンリー5世の葬儀に参列していないし、シャルル6世の葬儀にも参列していない)。

8.3 英仏百年戦争の終結

ヘンリー5世の死後、ヘンリー5世の弟ベッドフォード公ジョンがフランスの執政を担い、グロスター公ハンフリーがイングランドの執政を担う。しばらくして、グロスター公ハンフリーは前節で述べたバイエルン公アルブレヒト1世の長男ヴィルヘルム2世の娘ジャクリーヌと結婚する。そして、ネーデルラントの領有を主張し始める(ジャクリーヌは、シャルル6世の四男ジャンと結婚したが、ジャンの死後、ネーデルラント地方の政争に巻き込まれてイングランドに亡命していた)。

1424年、ハンフリーはイングランド軍を率いてカレーに上陸し、ネーデルラント地方のエノーを占領する。ブルゴーニュ軍が反撃し、イングランド軍は撤退した。翌1425年、ハンフリーは再度イングランド軍を編成し、再度ネーデルラントに侵攻するが、ブルゴーニュ軍が再度反撃して撃退する。

イングランド軍を撃退した後、ブルゴーニュ公フィリップ3世はアルマニャック派との講和を模索し、他方、金銀比価を変更してイングランドに通貨戦争を仕かける。

(ベッドフォード公ジョンは「同盟国」に侵攻するハンフリーの行動を咎めた。とはいえ彼はアルマニャック派と交戦中で、上陸したイングランド軍は「友軍」である。友軍との戦闘はできない。それが、フィリップ3世に通貨戦争の決断を促したように思う。ネーデルラント地方の領有に失敗したグロスター公ハンフリーは帰国してジャクリーヌと離婚し、愛人と再婚した。その後ヘンリー6世と対立し、1447年に逮捕されて急死する。他方、ジャクリーヌは敵対していたフィリップ3世の元に身を寄せる。フィリップ3世は寛大な態度で接した。彼女は別の男性＝ボルセレン卿フランクと再婚し、短い期間であったが、幸せな日々を過ごして1436年に死去する)

英仏百年戦争下で、イングランドもフランスも兵士に支払う多量の銀貨を必要とした。そのためイングランド王が発行する銀貨の質(純銀含有量)が大きく低下し、フランス王が発行する銀貨の質が「銀貨」と呼べないくらいに低下する場面があった。

だが、形式的に神聖ローマ帝国の版図であり、またハンザ商人が出入りしているネーデルラント地方で流通する銀貨の質は低下しない。そこで、イングランドはカレーに財貨製造施設を建設し、羊毛等の輸出で得た良質な銀貨を改鑄して新たな銀貨(低品質な銀貨)を鑄造し、自国に送る。だが、低品質な銀貨はネーデルラント地方にも流入する。それへの対策として、ブルゴーニュ公国も低品質な銀貨を鑄造し始める。

とはいえ、ヘンリー4世の代のイングランドとフィリップ2世の代のブルゴーニュ公国は互いに銀貨の質を保つ努力をしていたし、ハンザ商人の要望に応じて銀貨の質を高める場面もあった。しかし、ヘンリー5世の代になって、イングランド王が発行する銀貨の質が大幅に低下する。ヘンリー5世が多額の戦費を必要としたためである、と論じる歴史家が多い。だが、それだけではない。アルマニャック派がきわめて低品質な銀貨を発行し続けた。

アルマニャック派の低品質な銀貨はヘンリー5世が征服したノルマンディー地方やアキテーヌ地方、パリ周辺にも流入する。おそらく、当時のフランスでハイパーインフレが勃発し、イングランドにも波及していた。ブルゴーニュ公フィリップ3世も、グロスター公ハンフリー率いるイングランド軍を撃退した後、銀貨の質を低下させた。他方、彼は金銀比価を変更し、金貨の価値を増大させる。

歴史家たちは、グreshamの法則(「悪貨が良貨を駆逐する」という法則)を引用して、フィリップ3世が金銀比価を変更した原因は銀貨の質が低下したためである、と論じる場合がある。しかしフィリップ3世は通貨戦争を仕かけたのである。フィリップ3世の意図的な金銀比価変更(金貨の価値増)は、彼がはじめた意図的な通貨戦争である。

(当時、神聖ローマ帝国はフス戦争の最中で、ジギスムントにフィリップ3世の金銀比価変更を阻止することはできない。他方、ハンザ同盟は妥当な策として容認した。当然、フィリップ3世は神聖ローマ帝国の内戦を観察し、おそらくハンザ同盟の了解も得ていた)

フィリップ3世が仕かけた通貨戦争の下で、銀貨に依存していたイングランド経済が低迷する。1429年、イングランドはカレー勅令を発布して外国商人が金および金貨の支払いを要求することを禁じた。また外国との信用取引も禁じる。それに対するフィリップ3世の反撃は、イングランド産羊毛の輸入禁止である。ネーデルラント地方の毛織物業者は困惑するが、フィリップ3世に勝算があった。

(フィリップ3世が仕かけた通貨戦争は、「通貨安競争」ではない。金銀複本位制下での金銀比価変更は、交換手段＝銀貨に対する決済手段＝金貨の価値を増大させる金融政策であり、「通貨高競争」である。しかも実物商品の買い手側＝輸入国側が売り手側＝輸出国側に仕かける通貨戦争である。現代でも、貿易黒字国が低金利政策を実施し、貿易赤字国が高金利政策を実施する場合がある。むろん市場の交換規則＝市場原理に反する政策であるため、勝算がなければ低金利政策も高金利政策も墓穴を掘る)

ヘンリー5世とシャルル6世の死後、アルマニャック派の軍事行動が活発化する。他方、ベッドフォード公ジョンがアルマニャック派の制圧に乗り出す。

ベッドフォード公ジョン率いるイングランド軍は各地で戦勝を重ね、1428年にオルレアンを包囲した。だが、オルレアンの住民とアルマニャック派は籠城して抵抗する。オルレアンの籠城戦は長期化し、しかもスコットランド王がアルマニャック派に援軍を送るなどしたため、オルレアンは英仏戦争の要になる。そして

1429年、アルマニャック派が反撃してジャンヌ・ダルクが対岸(ロワール川の対岸)のトゥーレル城砦を占領し、イングランド軍が包囲を解く。その後イングランド軍はパテーの戦いで惨敗し、オルレアンから撤退する。

オルレアン解放後、太子シャルルがオルレアンに近いジアンに赴く。そして「ランスで戴冠する」と宣言した。だが、ジアンからランスまでの道程にブルゴーニュ軍が駐屯する三つの街(オーセール、トロワ、シャロン)が存在する。ジアンに集結していたアルマニャック派の諸侯や兵たちは、ブルゴーニュ軍との戦闘を回避してノルマンディー地方に進軍し、イングランド軍と戦い占領地を広げるほうがよい、と進言した。

だがジャンヌ・ダルクがシャルルの考えを支持する。ジャンヌ・ダルクの支持を得たシャルルは、フランス各地のアルマニャック派諸侯に書簡を送り、戴冠式への参列を要請する。シャルルは敵対しているブルゴーニュ公フィリップ3世にも書簡を送った。

シャルルは軍勢を率いてランスに進軍する。ジャンヌ・ダルクも同行する。なぜかブルゴーニュ軍の抵抗がなかった(オーセールは食料や飲料水等を提供し、トロワとシャロンは城門を開いて彼らの滞在を受け入れた)。ランスに到着したシャルルは戴冠してフランス王シャルル7世に即位する。だが、式典の参列者にブルゴーニュ公フィリップ3世の姿がない。ジャンヌ・ダルクは不安を感じたようである。彼女はフィリップ3世に書簡を送る。

1420年のトロワ条約は、イングランドかブルゴーニュ公国のどちらか一方が単独でアルマニャック派と講和することを禁じていた。フィリップ3世が太子シャルル＝シャルル7世の戴冠式典に参列しなかったのはそのためである。とはいえ、フィリップ3世と太子シャルル＝シャルル7世の間で事前の了解が成立していたように思う。おそらく、フィリップ3世は金銀比価変更を決断した1426年からアルマニャック派との講和を模索していた(ひょっとして、カレー勅令は、シャルル7世の戴冠を阻止しなかったブルゴーニュ公国に対するイングランドの報復だったのかもしれない)。

当時、イングランドはフス戦争で敗北し続けているジギスメントに援軍を派兵する準備をしていた。フランスのイングランド軍が窮地に陥ったため、この援軍はフランスに向かうことになるが、1429年の時点でトロワ条約を破棄すれば、フィリップ3世はローマ教皇の「破門」を免れない。

他方、妻を失っていたフィリップ3世はポルトガル王ジョアン1世の長女イザベルと婚約していた。そして、まさにそのイザベルがブルゴーニュ公国に向かっていった。イングランド産羊毛の輸入を禁止するのであれば、他国から羊毛を輸入しなければならない。イザベルとの結婚は、ポルトガルからアフリカ産の金、およびイベリア半島産羊毛の輸入を可能にする。これこそが、先に述べた彼の「勝算」である(ところが、歴史家や社会学者たちは、豪華な結婚式や金羊毛騎士団の結成等にばかり着目している)。

シャルル7世即位後、アルマニャック派はパリに進軍する。だが、ベッドフォード公ジョンは防備を固め、フィリップ3世は彼に援軍を送る。戦線が膠着し、アルマニャック派は休戦協定を結びパリから撤退した。その後ベッドフォード公ジョンはブルゴーニュ公国に王領の一部を割譲し、同盟関係の強化を試みる。だが、割譲された地域の住民が反発した。翌1430年、フィリップ3世は反乱を鎮圧する目的で軍を送る。ブルゴーニュ軍がオワーズ川沿いのコンピエーニュを包囲した。ジャンヌ・ダルクが軍勢を率いて戦うが敗北する。彼女は戦場で捕縛された。

アルマニャック派がパリに進軍した場面で、フィリップ3世がベッドフォード公ジョンに援軍を送ったため、シャルル7世は彼を罵る。ジャンヌ・ダルクも彼を罵った。現代の歴史家たちも、「裏切り」と論じている。しかし、フィリップ3世はイングランドに通貨戦争を仕かけ、さらに貿易戦争も仕かけていた。そして、通貨戦争と貿易戦争の両面勝利、すなわち「経済戦争」の勝利を確信している。

イングランドに「経済戦争」を仕かけたフィリップ3世にとって、アルマニャック派のパリ進軍は「子供のケンカ」である。とはいえ、彼には「子供のケンカ」からパリ市民を守る責務がある。戦線を膠着させて休戦協定を結ぶほうが望ましい。14世紀後半～15世紀後半に軍事戦略と経済戦略が重なり、それは今も続いているが、最初にそれを認識して実行した人物はブルゴーニュ公フィリップ3世である(コラム53)。

ポルトガルから金と羊毛の輸入を可能にしたフィリップ3世は、イングランド産羊毛の輸入を禁止する。イングランドの敗北(経済戦争の敗北)が決定した。他方、フス戦争は1434年にフス派が穏健派(ウトラキスト派)と急進派(ターボル派)に分裂し、リパニの戦いで急進派が大敗する。

1435年、神聖ローマ帝国の内戦＝フス戦争が終結しつつある状況下で、フィリップ3世はイングランドとアルマニャック派に講和を呼びかけ、ローマ教皇庁も交えて自領のアラスで和平会議を開催する。アラスの和平会議で、アルマニャック派とブルゴーニュ派の講和が成立した。しかしイングランドとアルマニャック派の講和は成立しなかった。他方、イングランドとブルゴーニュ公国の同盟が消滅する。

それでもフィリップ3世は、イングランドとの戦闘を避けていたが、しばらくしてベッドフォード公ジョンが死去する(ちなみに、ベッドフォード公ジョンに嫁いだフィリップ3世の妹アンヌは1432年に死去している)。1436年、ベッドフォード公ジョンとの「盟友関係」から開放されたフィリップ3世下のブルゴーニュ軍がカレーを包囲する。目的はイングランドが建設した財貨鑄造施設の封鎖である。他方、アルマニャック派がパリを奪還する。1440年頃まで、フィリップ3世はイングランドとの海戦を続け、その後ルクセンブルクを占領して支配する。他方、ブルターニュ公ジャン5世が継承問題を解決してイングランドへの反旗を鮮明にした。ブルターニュ軍はアルマニャック派フランス軍と連合軍を編成する。

1442年、イングランド王ヘンリー6世が成人宣言し、和平を模索しはじめる。ボーフォート枢機卿とサフォーク伯ウィリアムが両輪になり、彼を支えた。

1445年、ヘンリー6世がシャルル7世の姪マーガレットを娶り、トゥールで休戦協定を結ぶ。フランス側が出した結婚と休戦の条件は、イングランドが支配するメーンとアンジューの割譲であった。イングランドの諸侯たちがそれを知り、イングランド兵が暴走しはじめる。

1448年、イングランド軍の傭兵隊がブルターニュのフジエールを襲撃したため、ブルターニュ軍とアルマニャック派フランス軍(以後、「フランス軍」と呼ぶ)は休戦協定を破棄した。ブルターニュ軍とフランス軍は各地でイングランド軍を撃破する。そして1450年、フォルミニエの戦いでイングランド軍が大敗し、ノルマンディー地方から撤退する。その後ブルターニュ軍とフランス軍はアキテーヌ地方に向かい、ポルドーを陥落する。そして1453年、カスティヨンの戦いでイングランド軍を撃破する。

英仏百年戦争は、ブルターニュ軍とフランス軍がアキテーヌ地方を占領した1453年に終結した、と言える。イングランドはカレーを除くフランスの所領をすべて失うが、アキテーヌ地方はヘンリー2世とアリエノールが結婚した12世紀中頃から(すなわち約300年前から)イングランドの領土である。アキテーヌ地方の占領は、ブルターニュ軍とフランス軍の暴挙である。その後イングランドで和平派と主戦派の対立が激化した。

カスティヨンの戦いの敗北を知ったヘンリー6世は、精神疾患に陥り、主戦派のヨーク公リチャードが護国卿に就任する。1455年、ヘンリー6世が回復して和平派が勢力を挽回したが、セント・オールバーンズの戦いで主戦派が和平派の貴族や諸侯たちを殺害する。

歴史家たちは、1455年のセント・オールバーンズの戦いから1485年のボズワースの戦いまで約30年続いたイングランドの内戦を「薔薇戦争」と呼んでいる。英雄物語や戦争物語を書く作家にとって、薔薇戦争は最良の歴史素材かもしれない。だが、本書の主旨からかなり離れている。筆者は、薔薇戦争に言及するつもりはないが、重視すべきことがひとつある。フランス王家が和平派＝ランカスター家を支援し、ブルゴーニュ公家が主戦派＝ヨーク家を支援したことである。次節で論じるが、英仏百年戦争終結後、フランスでアルマニャック派とブルゴーニュ派の内戦が再開する。

かなり綿密に英仏百年戦争に言及したが、これには理由がある。英仏百年戦争前半、イングランド王エドワード3世がイングランド産羊毛の輸出を禁止し、後半、ブルゴーニュ公フィリップ3世がイングランド産羊毛の輸入を禁止した。また、フィリップ3世は金銀比価を変更し、イングランド政府はカレー勅令を発布して金の流出を抑止している。すなわち、英仏百年戦争は、軍事的な戦争に貿易戦争が複合した戦争で、通貨戦争も複合している(英仏百年戦争以前の戦争は、戦時下であっても、商品の輸出入を禁止したり金銀比価を変更したりする場面はない)。

とはいえ重視すべきことが他にあり、筆者は、金銀比価に変更が生じた英仏百年戦争下で、8世紀後半からはじまった金銀複本位制が崩壊したと考える。すなわち、ブルゴーニュ公フィリップ3世が金銀複本位制を葬った(むしろ、金銀複本位制が崩壊した原因は他にもある。神聖ローマ帝国でも、フス戦争下で金銀複本位制が崩壊している。とはいえ、英仏百年戦争の影響はきわめて大きい)。

15世紀に金銀複本位制が崩壊し、16世紀に神聖ローマ皇帝カール5世が本位貨幣制＝銀本位制を制定する。本位貨幣制＝銀本位制下で、ポルトガルやスペインが重金主義を推進し、オランダが重商主義を推進した。そして信用取引が増大し、また信用取引の形態が変形する。

コラム53: ジャンヌ・ダルクとアンジュー家の人々、そしてローマ教皇カリストゥス3世

フランスの歴史家レジヌ・ベルヌーは、著書「ジャンヌ・ダルクの実像(白水社)」でジャンヌ・ダルクの生存説やご落胤説を荒唐無稽な説として切り捨てている。筆者も同感で異論はない。だが、別の謎がある。筆者が抱く大きな謎は、ジャンヌ・ダルクが「フランスに行く」と言って故郷のドンレミ村を出立したことであり、また彼女が「フランス語」で書簡を書いていることである。

ドンレミ村はロレーヌ地方の村で、神聖ローマ帝国に近い。すなわち、当時のドンレミ村の日常会話はドイツ語である。だから、彼女は「フランスに行く」と言って出立したわけだが、彼女はフランス語を話せたのか。また、貧農ではなかったが、彼女の実家は農家である。当時、農村の娘が文字を学んでいたとは考えにくい。仮に学んでいたとしても、フランス語で書簡を書くのはむずかしい。彼女がフランス語に精通していたとすれば、誰が彼女にフランス語の読み書きを教えたのか。筆者が知る限り、この単純な疑問の答えを出している歴史家はいない。

当時のヨーロッパでは、農村の優秀な少女たちを集めて教育を施し、国王の側室や女官に登用することはめずらしいことではなかった。おそらく、ロレーヌ公ルネの指示を受けた誰かが、年齢が13歳に達した頃のドンレミ村の少女たちに教育を施した。ジャンヌ・ダルクは教育を施した少女たちの中でとりわけ忠誠心の強い女性だったのかもしれない。

ジャンヌ・ダルクを呼び寄せたのは、おそらくロレーヌ公ルネの母ヨランド・ダラゴンである。目的は籠城している人々の信仰心を高めてオルレアンを陥落を阻止し、イングランド軍の動きを封じて太子シャルルを即位させることであった。現実には、ジャンヌ・ダルクは、「オルレアンをイングランド軍の包囲から解放し、フランスで太子シャルルが戴冠すること」が自身が得た啓示であると兵士たちに語っている(しかも彼女がドンレミ村を出立する前から、「ひとりの乙女がイングランド軍の包囲から街を解放する」との噂がオルレアンで流れていた)。

フランス王シャルル7世は、幼少期をアンジュー公ルイ1世の長男ルイ2世の元で過ごし、成人して彼の長女マリーを娶る。マリーの母親(すなわちアンジュー公ルイ2世の妻)はヨランド・ダラゴンで、彼女はシャルル7世の育ての親でもある。また、彼女はアラゴン王ファン1世の長女で、1410年に嫡子を残さず死去したアラゴン王マルティン1世の姪である。

マルティン1世の死後、ルイ2世と彼女の長男ルイ3世がアラゴンの王位継承者のひとりになる。だが1412年に「カスペの妥協」が成立し、カスティーリャ王ファン1世(アラゴン王ファン1世とは別人)の次男フェルナンドがアラゴン王に即位する(ちなみに、「カスペの妥協」はアラゴンとカスティーリャの合併も促し、後の「スペイン」王国の建国を可能にする)。

アンジュー公ルイ2世とヨランド・ダラゴンにとって、「カスペの妥協」は耐えがたいものであったかもしれない。しかし嫡子ルイ3世にナポリ王に即位する道が残っていた。前章で述べたように、ナポリ王国はアンジュー家やアラゴン王国と縁が深い。

1382年、傍流のカルロ3世がナポリ女王ジョヴァンナ1世を殺害してナポリ王に即位した。そして、本文で述べたように、1382年にアンジュー公ルイ1世がイタリア遠征に赴く。アンジュー公ルイ1世は1384年に死去するが、目的はカルロ3世を退けナポリ王に即位することであった(ローマ教皇ウルバヌス6世はカルロ3世のナポリ王即位を認めたと、対立教皇クレメンス7世はアンジュー公ルイ1世のナポリ王即位を認めていた)。

アンジュー公ルイ1世の死後、カルロ3世は1385年にハンガリー王にも即位する。だが翌1386年に殺害され、ジギスムントが復位する(ちなみに、カルロ3世を殺害したのはジギスムントの妃マリアの母エリザベタである)。

他方、カルロ3世の嫡子ラディズラーオ1世がナポリ王に即位し、彼の死後、彼の姉ジョヴァンナがナポリ女王ジョヴァンナ2世(在位1414~1435年)に即位する。しかし彼女に嫡子がいない。シャルル7世がフランス王に即位すれば、ジョヴァンナ2世はシャルル7世の義兄、すなわちアンジュー公ルイ2世とヨランド・ダラゴンの嫡子ルイ3世を後継指名するかもしれない。おそらく、アンジュー公ルイ2世とヨランド・ダラゴンはそれを期待していた。

1416年、フェルナンド1世が死去し、彼の長男アルフォンソ5世がアラゴン王に即位する。ジョヴァンナ2世はアルフォンソ5世を後継指名したが、その後ルイ3世を指名する。しかしルイ3世はジョヴァンナ2世が死去する前年に死去する。その後ジョヴァンナ2世はルイ3世の弟ロレーヌ公ルネを後継指名して死去する。

ロレーヌ公ルネがナポリ王に即位し、ルイ2世とヨランド・ダラゴンの目的は達成したかのように見えた。しかしアラゴン王アルフォンソ5世がナポリ王位を篡奪する。そして1442年、ヨランド・ダラゴンが死去し、ロレーヌ公ルネはフランスに帰国する(ちなみに、本文で述べたヘンリー6世の妃マーガレットはロレーヌ公ルネの次女である。彼女は薔薇戦争で大活躍する)。

ジャンヌ・ダルクがオルレアン解放の中心的役割をはたしたのは想定外の成果であったが、彼女の役目はシャルル7世が戴冠した場面で終わっていた。その後彼女の「暴走」が始まるが、彼女は「死」を求めているように思う。

ジャンヌ・ダルクを捕縛して監禁したりニー伯ジャン2世はブルゴーニュ公フィリップ3世の有能な家臣で、フィリップ3世も彼女に一度面会している。シャルル7世の元に送り返すこともできたが、「お荷物」になると判断したようである。あるいは、国王の側室にふさわしい女性ではないと判断したのかもしれない。フィリップ3世は彼女をイングランド軍に引き渡す。

筆者は、その後の裁判と彼女の火刑に言及するつもりはない。忠誠心の強い彼女は死ぬまで「嘘」を貫き通したが、重要なことは、後に彼女を火刑に処した判決を覆し、死後の彼女を無罪にして「聖女」にでっち上げたローマ教皇がクリストゥス3世(在位1455~1458年)であった、ということである。

教皇に就任する前のクリストゥス3世は、上述したフェルナンド1世の側近で、ベネディクトゥス13世の対立教皇クレメンス8世を退位させるために暗躍した。教皇就任後、彼はアルフォンソ5世と対立し、前任のローマ教皇ニコラウス5世を徹底批判している。理由は、教会の改修工事や文芸に多額の費用を使い、十字軍の結成を疎かにした、というものである。十字軍結成に邁進するクリストゥス3世に、ジャンヌ・ダルクを「聖女」にしなければならない理由があった。

本文で、英仏百年戦争は1453年に終結したと述べたが、同年、オスマン軍がコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼしている。クリストゥス3世は、十字軍を結成してコンスタンティノープルを奪還し、東方正教会の吸収合併を考えていたように思う。そしてロレーヌ公ルネが名目上のエルサレム王に即位していた。

だが、クリストゥス3世は1458年に死去する。クリストゥス3世の死後、ローマ教皇に就任したピウス2世(在位1458~1464年)と次のパウルス2世(在位1464~1471年)も十字軍結成に尽力したが、目的をはたせなかった。

8. 4 コンスタンツ公会議とハプスブルク家の台頭、フランス王家の移動

1378年、神聖ローマ皇帝カール4世が死去する。彼の長男ヴェンツウエル(ボヘミア王ヴァーツラフ4世)が即位するが、1400年に退位し、ヴィッテルスバッハ家のループレヒトが即位する。しかしループレヒトは1410年に死去する。ループレヒトの死後、ハンガリー王ジギスムント(カール4世の次男。在位1410~1437年)が神聖ローマ皇帝に即位した。

前章で述べたように、ジギスムントは1396年のニコポリスの戦いでオスマン帝国に大敗している。だが、そのオスマン帝国は1402年のアンカラの戦いでティムール帝国に大敗し、勢力を大きく縮小していた。他方、ドイツ騎士修道会がポーランド・リトアニア同君連合に大敗したタンネンベルクの戦い(グルンヴァルトの戦い)の戦後処理、およびローマ教皇庁の分裂(シスマ)解消が当時のヨーロッパの大きな政治課題になっていた。それら政治課題を解決する上で、カール4世の血を継ぐジギスムントの即位は順当であるように見えた。

即位後、ジギスムントはコンスタンツ公会議を開催する。コラム44で述べたように、コンスタンツ公会議は史上初の国際会議である。しかも「立法会議」であった。神聖ローマ皇帝もローマ教皇も議決に従う責務を負う。コンスタンツ公会議で、ローマ教皇庁の分裂が解消し、ポーランド・リトアニア同君連合が承認された。

しかし、神学者ヤン・フス(プラハ・カレル大学学長。ローマ教皇庁が発行する免罪符=贖宥状に反対し、教会改革を論じていた)を火刑に処したため、ボヘミアで内乱=フス戦争が勃発する。内乱=フス戦争にはワット・タイラーの乱のような側面もあったが、「一揆」と呼ぶにはあまりに長く続いたと言わなければならない。フス戦争は約20年続いた。

フス戦争が長期化した原因は三つある。まず、首謀者のボヘミア貴族ヤン・ジシュカがフス派の民衆に小銃を配布したことである。剣槍の扱いに不慣れた民衆も戦闘に参加できるようになり、しかも歩兵に対する騎兵の優位性が喪失した。

(小銃は野戦を根底から覆した。フス派の民衆が馬を銃撃し、ジギスムントが編成した「十字軍」が壊滅している。ちなみに、小銃の発明者がヤン・ジシュカであったか否かはわからない。とはいえ、野戦で多量の小銃を最初に使用したのはヤン・ジシュカである。その後のヨーロッパで軍隊の主力が大砲を撃つ砲兵と小銃を撃つ歩兵になる。そして15世紀中頃から、西アジアや中央アジアの騎馬兵がオスマン帝国やロシア帝国の歩兵に敗退し続ける。すなわち、ユーラシア大陸東西の「力」の向きが逆転した)

次にコンスタンツ公会議で一応の決着を得たドイツ騎士修道会とポーランド・リトアニア同君連合の戦争が再発したことである。「戦争」は約4年続き、ドイツ騎士修道会は再度大敗する(その後ドイツ騎士修道会は「13年戦争(1454~1466年)」でも大敗し、支配地域がケーニヒスベルクとその周辺に縮小する)。最後に、ジギスムント本人が無能であったことである。軍事的解決に失敗したジギスムントは政治的解決を試みたが、フス戦争を終結できなかった。

ところで、ヤン・フスは免罪符=贖宥状の発行に反対したが、ローマ教皇庁が最初に贖宥状を発行したのは11世紀末である。ローマ教皇庁は、十字軍に従軍する貴族や諸侯に贖宥状を配布した。従軍できなかった貴族や諸侯が寄進して贖宥状を得る場面もあったが、当時の贖宥状は集金手段ではない。

しかしフランス王フィリップ4世が聖職者への課税=教会課税を決断した後、ローマ教皇ボニファティウス8世が「聖年祭」を開催して贖宥状をバラ撒く。その後のボニファティウス8世の憤死やアヴィニオン捕囚は前章で論じたが、ボニファティウス8世の代から贖宥状がローマ教皇庁の集金手段になる。

歴史家たちの贖宥状に対する論調は厳しいが、彼らはもっぱらレオ10世(教皇在位1513~1521年)がバラ撒いた贖宥状を論じ、ボニファティウス8世がバラ撒いた贖宥状にあまり言及しない。そのためローマ教皇庁の「本音」を見落としているように思う。

3章で論じたが、フランク王カール1世の死後、カトリック教会は金貨を発行する。すなわち、8世紀後半から、ビザンツ皇帝とローマ教皇がそれぞれ独自金貨を発行し、金銀複本位制下の決済手段を提供した。だが1204年に第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊してラテン帝国を建国した後、ヨーロッパの金貨発行者がローマ教皇だけになる。

1252年、ローマ教皇庁はフィレンツェの鑄造所を強化して鑄造する金貨の質を厳正化し、新金貨=フローリン金貨を発行した。その後決済手段の提供者であり続けることが、ローマ教皇の責務になる。ローマ教皇庁は質を維持しながらフローリン金貨を発行し続けたが、金の産地はハンガリーとアフリカに偏在している。したがって、金の獲得は容易でない。

他方、1356年に神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布し、ヨーロッパの各諸侯たちが独自の金貨=グルデン金貨を鑄造して発行しはじめる。おそらく、贖宥状のバラ撒き目的は低品質な金貨(グルデン金貨や過去の金貨)を回収して改鑄し、高品質なフローリン金貨を発行し続けることであった。

筆者には、ウィクリフを信奉していたヤン・フスが贖宥状に反対した理由は、贖宥状そのものよりローマ教皇が金貨を発行するというカトリック教会のあり方であったように思える。

古代ローマでは、ローマ皇帝が金貨を発行していた。同様に、ビザンツ帝国ではビザンツ皇帝が金貨を発行していた。古来、金貨発行者は「皇帝」である。古来の慣習にしたがえば(あるいは新約聖書の記載

にしたがえば)、ローマ教皇は神聖ローマ皇帝にフローリン金貨の鑄造と発行を譲渡しなければならない。それにより金銀複本位制が回復し、「帝国」の秩序も回復するかもしれない。だが、ジギスムントがヤン・フスと同じ考えを持つ場面はなかった。

(ヤン・フスは「古代」に遡行したが、彼の思想は「近代」を引き寄せた。ローマ教皇庁はフローリン金貨を発行する前に金利を解禁したが、筆者の認識では、金利解禁もフローリン金貨発行も「広義の中世」の成熟期の産物である。他方、神聖ローマ皇帝カール4世が發布した金印勅書が「広義の近代」の出現期の産物である。15世紀の英仏百年戦争下で金銀複本位制が崩壊した後も、ローマ教皇庁は低品質な金貨を回収して改鑄し、高品質なフローリン金貨を発行し続けた。しかし1517年にローマ教皇レオ10世が贖宥状をバラ撒いて低品質な金貨の回収を試みたが、回収した財貨はほとんど銀貨で、金貨は少なかったと思う。1523年に発行したフローリン金貨が最後のフローリン金貨になる。フローリン金貨の消滅はローマ教皇およびローマ教皇庁の「力」の消滅を意味するが、他方、翌1524年に神聖ローマ皇帝カール5世が通貨法を制定して新銀貨を発行し、本位貨幣制＝銀本位制を発明する。それについては後述するが、フローリン金貨消滅と本位貨幣制＝銀本位制発明後のヨーロッパで「広義の近代」の突破期がはじまる)

ジギスムントは約27年在位したが、コンスタンツ公会議(1414～1418年)後の約20年で神聖ローマ帝国を崩壊させてしまった、と言える。ジギスムントは嫡子を残すことなく死去し、ハプスブルク家のオーストリア大公アルブレヒト2世が即位する。だが、彼は約2年後に死去する。アルブレヒト2世の死後、彼の従兄弟フリードリヒがドイツ王に即位する。そして1452年、神聖ローマ皇帝フリードリヒ3世(在位1452～1493年)に即位する。

当時、中央ヨーロッパと東ヨーロッパはオスマン帝国との戦闘を繰り返していた。だが、フリードリヒ3世がオスマン帝国との戦闘に関心を示す場面はなかった。彼は1453年のコンスタンティノープル陥落にも関心を示さない。あまりの怠慢に怒った弟のオーストリア大公アルブレヒト6世が彼を幽閉し、その後ハンガリー王マーチャーシュ1世がウィーンを一時包囲する場面があった。しかしアルブレヒト6世は1463年に死去し、マーチャーシュ1世も1490年に死去する。

オーストリア大公アルブレヒト6世とハンガリー王マーチャーシュ1世が死去したおかげで、フリードリヒ3世は40年以上在位する。フリードリヒ3世の代から、ハプスブルク家による神聖ローマ皇帝の世襲がはじまるが、歴史家たちは彼を無能で怠慢な皇帝であったと論じている。しかし、彼の治世下で大規模な民衆反乱が勃発していない。彼は倏約家で、民衆の負担軽減に努めた。他方、西ヨーロッパの争乱は彼の長男マクシミリアンが対処する。

英仏百年戦争終結後、フランス王シャルル7世は官僚機構を整備して国王軍(常備軍)を編成し、1461年に死去する。シャルル7世の死後、彼の長男ルイがフランス王ルイ11世に即位する。即位後、ルイ11世は王権を強化して王領を拡大した。

ルイ11世の圧政に反発した彼の弟シャルルとブルゴーニュ公フィリップ3世の長男シャルル、ブルターニュ公フランソワ2世が公益同盟を結成して国王軍と戦う。この内戦＝公益同盟戦争は1465年に和睦するが、仲裁したブルゴーニュ公フィリップ3世が1467年に死去し、彼の長男シャルルがブルゴーニュ公に即位して戦闘が再開する。しかし1472年にルイ11世の弟シャルルが死去し、その後ブルターニュ公フランソワ2世が休戦を受け入れたため、公益同盟は解体した。

他方、ロレーヌ(ドイツ名ロートリンゲン)地方や隣接するアルザス(ドイツ名エルザス)地方、スイスの諸侯たちがブルゴーニュ公シャルルに反旗を翻す。そして1477年、ナンシーの戦いでブルゴーニュ公シャルルが戦死する。

ブルゴーニュ公シャルルの死後、フランス王ルイ11世はブルゴーニュ公国の併合＝王領化を目指す。だが、シャルルの一人娘マリーがフリードリヒ3世の長男マクシミリアンと婚約していた。彼女はただちにマクシミリアンと結婚し、ブルゴーニュ公国を神聖ローマ帝国の保護下に置く。フランスと神聖ローマ帝国の戦争が勃発し、1479年のギネガテの戦いでマクシミリアン率いるブルゴーニュ軍と南ドイツ軍の混成軍がフランス軍を撃破する。

マクシミリアンとマリーの夫婦仲はよかった。二人の間に長男フィリップと長女マルグリットが誕生する。しかし1482年、マリーが落馬事故で死去する。その後マクシミリアンはルイ11世と和約し、彼の長女マルグリットとルイ11世の長男シャルルが婚約する。そして1483年、ルイ11世が死去し、ルイ11世の長男シャルルがフランス王シャルル8世に即位する。

即位後、シャルル8世はブルターニュ地方＝ブルターニュ公国の王領化を目指す。内戦が勃発し、1488年にブルターニュ公フランソワ2世が死去する。ブルターニュ公フランソワ2世の長女アンヌが急遽マクシミリアンと代理結婚し、ブルターニュ公国を神聖ローマ帝国の保護下に置く。だが1491年にフランス軍がブルターニュ公国に進軍し、シャルル8世はマルグリットとの婚約を破棄してアンヌを娶る。

名実ともにブルターニュ地方がフランス領になったが、娘の婚約と自身の結婚を破棄されたマクシミリアンが怒る。1492年、ネーデルラント地方の反乱を鎮圧したマクシミリアンはブルターニュ地方に進軍し、ブルターニュ自由伯領(フランシュ・コンテ地方)を占領する。シャルル8世が譲歩して1493年に和約が成立し、ネーデルラント地方とルクセンブルク、ブルターニュ自由伯領が神聖ローマ帝国の版図になる。そして他のブルターニュ地方がフランス王領になり、ブルターニュ公領＝ブルターニュ公国は解体した。

(シャルル8世に婚約を破棄されたマルグリットは、アラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イサベル1世の一人息子ファンと結婚する。だがファンは病弱であった。彼女が嫁いだ約半年後にファンが死去する。ファンの死後、彼女はサヴォイア公フィリベルト2世と再婚したが、フィリベルト2世も約3年後に死去する。その後彼女は帰国してネーデルラント地方の執政を担う。彼女がファンと結婚した場面で、彼女の

兄フィリップもフェルナンド2世とイサベル1世の次女ファナと結婚した。そしてファナとの間に長男カルロスと次男フェルディナントが誕生する。しかし1506年にフィリップが死去したため、マルグリットが長男カルロスを養育し、「スペイン」王に即位したフェルナンド2世が次男フェルディナントを養育する)

1494年、シャルル8世率いるフランス軍がイタリアに侵攻し、ミラノやフィレンツェ、ローマを制圧してナポリ王国を占領する。だが、1493年にフリードリヒ3世が死去し、マクシミリアンが神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世に即位していた。そして後のマリーと死別した彼はミラノ公国の公女ビアンカと再婚していた。他方、イベリア半島では、アラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イサベル1世が結婚し、「スペイン(エスパーニャ)」王国が誕生している。フェルナンド2世は、1492年にナスル朝の首都グラナダを陥落し、その後ナポリ王国の領有を主張する(コラム54)。

フェルナンド2世とローマ教皇が呼びかけ、スペインと神聖ローマ帝国、ローマ教皇庁とヴェネツィアが反仏同盟を結成した。フランス軍はフォルノーヴォの戦いで反仏同盟軍に惨敗する。その後シャルル8世は嫡子を残すことなく1498年に死去する(改築中の城を視察中に誤って鴨居に頭を打ちつけ死去したらしい)。

シャルル8世の死後、傍流のオルレアン公ルイがフランス王ルイ12世に即位する。ルイ12世はシャルル8世の姉ジャンヌと結婚していたが、彼女と離婚して未亡人になった王妃アンヌと再婚し、ブルターニュ地方を護持する。その後イタリア遠征を再開してミラノ公国を占領し、ナポリ王国をスペインと分割して統治した。

だが1511年にローマ教皇ユリウス2世がスペインとイングランド、神聖ローマ帝国を説得して「神聖同盟」を結成し、イタリアからフランス軍を追放する。そして1515年、ルイ12世が死去し、彼の長女クロードを娶ったアングレーム伯フランソワがフランス王フランソワ1世(在位1515~1547年)に即位する。フランス王家がオルレアン家からアングレーム家に移動した。

コラム54: ミラノ公国とナスル朝グラナダ王国

皇帝派と教皇派の闘争、その後のシチリア晩禱戦争下で新ロンバルディア同盟が解体した。そして1395年、ヴィスコンティ家が神聖ローマ皇帝ヴェンツェルから公爵位を得て「ミラノ公国」を開国する。

ミラノ公国は領地拡大を目指すヴェネツィアと戦争を繰り返すが、1453年にオスマン帝国がコンスタンティノープルを陥落した後、「ローディの和(当時のイタリアを支配していたフィレンツェとヴェネツィア、ナポリ王国とミラノ公国、ローマ教皇庁の5カ国同盟)」を結び和睦する。その後ミラノ公国はスペインとフランスの争奪地になり、1535年にスペインが征服する(「ローディの和」の下で、イタリアがひとつになる場面はなかった)。

ところで、日本では、イベリア半島のレコンキスタ運動を「国土回復運動」と呼んでいるが、意識あるいは誤訳である。レコンキスタ運動はイベリア半島で約800年続いた「再征服運動」である。目的は異教や異端の撲滅であった。

1492年にナスル朝の首都グラナダを陥落した後、スペイン王フェルナンド2世は異教徒追放令を発令する。スペイン王国が国外追放した異教徒はイスラーム教徒とユダヤ教徒である。15万前後のユダヤ教徒(セファルディム系ユダヤ人)が地中海を経由してイタリアやギリシャ、エジプトやパレスチナに逃れ、イスラーム教徒がモロッコや北アフリカに逃れた。

イベリア半島から追放されたユダヤ教徒たちは、イタリアのトスカーナ地方に植民都市リヴォルノを建設し、ギリシャやエジプト、パレスチナで商業を営む。メディチ家が支配する16世紀のトスカーナ大公国はユダヤ教徒に寛容で、オスマン帝国の支配下にあったギリシャやエジプト、パレスチナのイスラーム教徒にも寛容であった。

(ナスル朝を滅ぼしたフェルナンド2世は、その後1512年にナバラ王国を併合する。とはいえ占領したのはピレネー山脈南側だけである。ナバラ王国は縮小したが、ピレネー山脈北側に残る。そして1589年、ナバラ王アンリ4世が初代ブルボン朝フランス王に即位する)

ちなみに、ナスル朝は1232年に誕生した小さな王朝であったが、イベリア半島最後のイスラーム王朝である。当初、ナスル朝はカスティーリャ王国に臣従し、他のイスラーム王朝(ハフス朝やマリーン朝。本書ではイベリア半島内でのイスラーム王朝の変遷に言及しない)と戦う場面もあった。しかし14世紀からカスティーリャ王国やアラゴン王国と敵対するようになる。

有名なアルハンブラ宮殿はナスル朝が建設した。アルハンブラ宮殿は巨大な城塞で、水道や浴場も完備している。16世紀に、神聖ローマ皇帝カール5世が増築や改築を施す。彼は1526年にポルトガル王マヌエル1世の長女イサベルと結婚した後、約半年間、彼女と滞在している。

イサベルは翌1527年に長男フェリペ(後のスペイン王フェリペ2世)を出産し、カール5世が不在の間、スペインを統治する。そして1539年に死去する。カール5世は再婚しなかった。彼女の死後、カール5世は喪服で過ごすのが、アルハンブラ宮殿での思い出がカール5世の心を支えたように思う。

8.5 フィレンツェ公会議と初期産業革命

12世紀末～13世紀初頭のフィレンツェの人口は約3万であったが、商品経済が深化し、13世紀末～14世紀初頭に約9万になる。そして二次商品の生産者も利潤を追求しはじめる。

13世紀末～14世紀初頭のフィレンツェで、約3万の人々が毛織物業に従事した。製造形態は家内制手工業である。商人がイングランド等から羊毛を輸入し、職工(チョンピ)を雇って梳かした。そして梳かした羊毛を各家庭に配布し、各家庭で製造した毛織物を回収して輸出した。

英仏百年戦争下で、イングランドやフランスの銀貨の質が低下したが、フィレンツェが鑄造してローマ教皇が発行するフローリン金貨の質は落ちない。フローリン金貨の信用は絶大で、フィレンツェ商人たちは金融も兼業するようになる。

前章で述べたように、13世紀のイタリアで皇帝派と教皇派の内戦が勃発し、その後シチリア晩禱戦争が勃発した。フィレンツェは教皇派であった。しかし深化した商品経済の下で人々が高度な自治を要求しはじめていた。13世紀末～14世紀初頭のフィレンツェで、教皇派が高度な自治を求める人々の党＝白党と執政をローマ教皇庁に委ねる人々の党＝黒党に分裂する。そして、鬭争が勃発し、白党が敗北する。その後黒党がドナーティ派とトシギ派に分裂し、新たな鬭争がはじまる(詩人ダンテは、白党に所属していた。彼は1301年に永久追放されている)。

しかし1308年にアヴィニョン捕囚が勃発し、1310年に神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世がイタリアに進軍する。フィレンツェの人々は鬭争を棚上げしてハインリヒ7世に立ち向かう。ハインリヒ7世の死後、フィレンツェを含むトスカーナ地方全域で都市抗争がはじまる。フィレンツェはシエーナや他の都市の標的にされ、ナポリ王国に援軍を求める場面さえあった。

他方、英仏百年戦争で多額の戦費を費やしたイングランド王エドワード3世が借金返済を拒否したため、フィレンツェ商人が窮地に陥る。地主でもあった彼らは、小作農に小麦の種籾を提供できなくなる。フィレンツェ近郊の農業が停滞し、飢饉が勃発した。そして1348年、黒死病が蔓延する。その後黒死病は約10年周期(1359年と1363年、1371年、1383年)で蔓延する。

(ジョヴァンニ・ボッカッチョは、著書「デカメロン」に、「(黒死病で)10万人死んだ」と書いている。だが当時のフィレンツェの人口は9万前後である。とはいえ、フィレンツェの城壁内に住む人々の人口が約9万で、近郊も含むフィレンツェ都市国家＝コムーネ全体の人口は20万ほどであったかもしれない。黒死病は都市部だけでなく農村部でも蔓延した)

ところで、フィレンツェの人々は、黒死病で人口の約半数を失ってもただひたすら神に祈っていたのだろうか。歴史家たちは、この素朴な疑問に対する答えを出していないが、重視すべきことがひとつある。筆者の知る限り、イタリア(そしてフランスやスペイン、ドイツやイングランド)各地で黒死病が蔓延したが、同時代のギリシャ(そしてポーランドやハンガリー)で黒死病が蔓延したとの記録がない。

ギリシャは、イタリアの隣国である。黒死病で人口の半数を失ったフィレンツェの人々が当時のギリシャ＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国に「知」を求めたとしてもおかしくない。当時の「ビザンツの知」の中心は新プラトン主義とプラトン主義であるが、むしろプラトンが語った「イデア」が黒死病の蔓延を阻止したわけではない。新プラトン主義から派生した設計の思想、およびプラトン主義から派生した公共の思想が黒死病の蔓延を阻止していた。

当時のコンスタンティノープルは上下水道が完備した都市で、テッサロニキ等他のギリシャ都市も上下水道が完備していた。すなわち、設計の思想と公共の思想が各ギリシャ都市の公衆衛生を改善し、黒死病の蔓延を阻止していた。

フィレンツェは、パレオロゴス朝ビザンツ帝国から設計の思想と公共の思想を輸入する。有名なサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の起工は13世紀末であるが、14世紀に「設計」が施され、巨大化している。目的は空間を拡大して公共性を高め、さらに屋内の衛生状態を良くすることであったと思う。サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂は1461年に完成する。

(より重要な設計の思想と公共の思想の具現が他にある。コンスタンティノープルやテッサロニキでは、手工業＝絹織物業の作業現場が「工場」であった。工場は巨大な建物であるが、教会のような施設ではない。工場は特定商品を製造する目的で設計し、建造した巨大な建物である。筆者の認識では、ビザンツ帝国が「工場」を発明した。5章で、ビザンツ帝国の主力商品は絹織物であったと述べたが、ビザンツ帝国は国营工場で絹織物を生産していた。他方、縮小したビザンツ帝国＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国は領邦国家に変貌し、人口密度が増大して都市共同体と農村共同体の差異を超越する「公共」の概念が誕生していた。そして、おそらく「国民」の概念も誕生していた。たとえば、後述するゲオルギオス・ゲミストス・プレトンは、「神」という言葉を使わず「神々」という言葉を使い、自身を「ローマ人」と呼ばず「ギリシャ人」と呼んでいる。4章で述べたが、ビザンツ帝国は9世紀のアモリア朝期から奴隷も含めて民衆のほぼ全員が納税者になっている。政治学者のベネディクト・アンダーソンによれば、「国民」は想像の共同体である。しかし支配者層にとって、民衆は徴税対象である。支配者層にとって、民衆の身分や職業、人種や信仰はどうでもよい。「納税者」であることが重要である。おそらく、パレオロゴス朝ビザンツ帝国で身分や職業の差異を隠蔽する「等民」の概念と人種や信仰のちがいを超越する「国民」の概念が誕生していた)

神聖ローマ皇帝ジギスムントが1414年に開催したコンスタンツ公会議では、公会議の定期開催も議決した。そして、多くの司教や司祭、神学者たちが公会議の定期開催がローマ教皇の独断的な立法措置、および専横を抑止すると期待していた。

そのような状況下で、1431年にローマ教皇エウゲニウス4世がバーゼルで公会議を開催する。しかしエウゲニウス4世と公会議主義者たち(公会議を立法会議であると考え、公会議の決議が教皇の立法措置や法解釈に優先すると考える司教や司祭、神学者たち。オッカムやマルシリウスの思想に影響されていた)が対立し、出席者が分裂する。とはいえ、フス戦争が続いていたため、公会議の定期開催を廃止する場面はなかった。フス戦争終結後、東西キリスト教会の合同が公会議の新たな中心議題になる。そして1439年、フィレンツェで東西両キリスト教会が公会議＝フィレンツェ公会議を開催する。

パレオロゴス朝ビザンツ帝国の哲学者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンがフィレンツェを訪問し、ニカイア府主教ヨハネス・ベッサリオンがフィレンツェ公会議に出席した。プレトンは、メディチ家のコジモ・デ・メディチ＝老コジモが主催した勉強会で新プラトン主義とプラトン主義を論じる。そして、おそらくパレオロゴス朝ビザンツ帝国の統治形態も論じた。

トマス・アキナスは、聖書の記述にアリストテレスが語った資料＝ヒュレーや形相＝エイドス等の考えを組み合わせ、著書「神学大全」で「宇宙原理」を解説している。すなわち、当時のカトリック教会の聖職者たちは、アリストテレスの思想を学んでいた(当時のローマにポエティウスが訳したアリストテレスの著作は残っていない。おそらく、帰還した十字軍兵士たちがイスラーム世界からアリストテレスの著作を持ち込んだ)。だが、プラトンの思想を学んでいない。老コジモが主催した勉強会がプラトンの思想を学ぶきっかけになり、それが100年以上続いたルネサンス運動のはじまりになる(コラム55)。

(哲学者の國分功一郎氏は、著書「近代政治哲学(筑摩書房)」で、「近代国家には封建国家が抱えていた何らかの問題点の解決が期待されていたはずである。すなわち、その問題点の解決を見据えた設計が試みられていたと考えられる」と論じている。だが、「設計」という思考作業そのものがビザンツ帝国＝ギリシャから輸入した「近代」であり、主権＝立法権や主権国家＝近代国家の誕生に先行している。黒死病で苦しんだ当時の西ヨーロッパの知識人にとって、スコラ哲学者が語る宇宙原理やカトリック司祭の教義は無力な説法で、新プラトン主義とプラトン主義が希望であった)

黒死病の災難をなくす必要があった。ルネサンス運動は西ヨーロッパ全域に波及する。歴史家の横山紘一氏が、著書「ルネサンスと地中海(中央公論社)」でルネサンス運動の全貌を論じておられるが、ルネサンス運動で活躍した芸術家や人文学者たちは概ね「設計者」である。しかし筆者が重視したいのは、新プラトン主義＝設計主義が伝播して具現した地域である。ネーデルラントと南ドイツで設計主義が具現する。すなわち、ネーデルラントと南ドイツで初期産業革命が勃発した。

古代ヨーロッパでは、民衆はたいがい麻服を着用していた。しかし麻衣は硬質で保温性が低い。中世から、民衆も毛織物を着用するようになるが、帆船で使用するロープや帆布は丈夫な麻糸でつくるほうがよい。「広義の近代」の出現期後半(14世紀後半～16世紀後半)に、衣服以外の分野で麻糸や麻布が商品になる。麻製のロープや布を製造したのはネーデルラントや南ドイツの職工(ツunft)たちである(むしろ「工場」を無視できない。ルネサンス運動以降、ネーデルラントや南ドイツでも職工たちが工場で働くようになり、人間労働の集約化ははじまる)。

フィレンツェ同様、ネーデルラント南部(概ね現在のベルギー)の工場は毛織物を製造したが、ネーデルラント北部(概ね現在のオランダ)の工場はバルト海沿岸から麻糸を輸入して麻製のロープや布を製造した。麻製のロープや布が風車と帆船の建造を促進する。これまで、羊毛や毛織物を例にして商品経済に言及する場面があったが、最初に大規模な商品経済＝位相構造を形成した商品は麻糸と麻布である。筆者の認識では、麻製のロープや布の工場生産および量産、そして労働力の集約化が初期産業革命である(コラム56)。

(14世紀初頭、ネーデルラント北部＝オランダの職工たちも毛織物で製造していたが、彼らが製造する毛織物は厚手の毛織物＝旧毛織物であった。しかし下着と上着を重ね着するのであれば、毛織物は厚手より薄手のほうが都合がよい。そこで、ネーデルラント北部の職工たちはネーデルラント南部から薄手の毛織物＝新毛織物を輸入し、衣服を製造しはじめる。他方、ネーデルラント北部は漁業が盛んで、ニシンは主要な輸出商品であった。14世紀後半のネーデルラント北部で、職工たちがバルト海沿岸から麻糸を輸入し、麻製のロープや布を製造しはじめる。そして、漁船が帆船になり、漁民たちは北海に遠洋して捕鯨も行うようになる。また、風車を使った湿地帯の干拓がはじまり、麻製ロープや麻布の需要が増大した。15世紀後半から、ネーデルラント北部の工場が麻ロープや麻布を量産しはじめる。そして造船業がはじまり、ネーデルラント北部はバルト海沿岸や北海沿岸から多量の木材を輸入して1000トン級の大型帆船＝フライト船を建造しはじめる。風車の動力が製材で使用されるようになり、ネーデルラント北部は世界最大の造船国になる。そして海運も営むようになる。とはいえ、ネーデルラント北部が台頭するのは17世紀以降で、フライト船を輸出しはじめるのも17世紀以降である。すなわち、八十年戦争期である)

南ドイツでも麻糸と麻布の工場生産＝量産がはじまる。とはいえ、ネーデルラント北部とちがいで、南ドイツでは域内の農村が麻を栽培して出荷した。南ドイツの商人たち(主にアウクスブルク商人)は域内の農村から麻を購入し、工場で麻糸や麻布を製造して地中海沿岸に運び、ヴェネツィア商人等に売り渡す。南ドイツで製造した麻糸や麻布は地中海を航行する帆船＝ガレー船の建造で使われた。

海に面していないため、南ドイツで造船業が誕生する場面はなかった。しかし鉱業が発達する。堅坑採掘がはじまり、排水技術が進歩した。そしてフッガー一家やウェルザー一家が巨大化する(コラム57)。

コラム55: 新プラトン主義とプラトン主義

西ヨーロッパは、ギリシャ＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国から新プラトン主義とプラトン主義を輸入した。新プラトン主義が「設計」を具現し、プラトン主義が「公共」を具現する。
ところで、哲学者の竹田青嗣氏は、著書「プラトン入門(筑摩書房)」で、アリストテレスの思想＝アリストテレス主義を以下のように論じ、

「アリストテレスの原因(アルケー)概念の説明は、一見、きわめて合理的である。しかし、たとえば彼の神の概念は、あらゆることがらに原因がある以上、その系列を遡ってそれ以上遡行できない最後の原因があるはずだ、という推論から得られる。これは、後にスコラ哲学において、神の存在論的(本体論的)証明と並んで宇宙論的証明と呼ばれる証明の原型にほかならない(このような証明は、トマス・アクィナスやライプニッツなども行っている)。だが、あらゆるものに原因があるかぎり、それ以上遡れない究極の原因があるはずだという一見合理的な推論は、カントが示したように、明らかな誤謬推理である」

その後、以下のように論じてプラトンの思想＝プラトン主義あるいは「イデア」を擁護している。

「アリストテレスにおいて「善」は、四因(アリストテレスが論じた四原因)の一要素としての目的因を言い換えたものだ。しかし、プラトンにおいてそれは、「原因－結果」という理由や根拠を問おうとする視点それ自体を生み出すものである。原因－結果、構造－動因、認識－対象、これらは決してそれ自体として存在するものではない。それらは、根本的にある「価値論的公準」、つまり何が有用か、何が害か、何が大事か、といった有意義性の連関の系列として可能になる。この連関の中で、事物ははじめて観点として現れる。そしてこの公準は、決して他の因果の公準と並列的に並べることができない独自の意味をもっているのである(近代哲学ではじめてこのことに気づいたのはカントではなくヒュームであり、ニーチェやハイデガーがこの考えを推し進めた)」

パンクラチオン(目潰しと噛み付きだけを禁止した古代ギリシャの格闘競技)の打撃技はボクシングより劣るし、組技はレスリングより劣る。プラトンは、パンクラチオンをそのように語り、格闘競技の勝敗は競技者の力量より競技ルールに依存すると考えた。良いルールが良い勝敗を決定し、真のチャンピオンを決める。すなわち、「原因－結果」の根底に「価値論的公準」がある。竹田氏の言説は正しい。現実には、プラトンの思想＝プラトン主義が「公共」を具現した。

だが、竹田氏はその後以下のように述べ、アリストテレス主義と新プラトン主義を同一視している。

「プラトンから六百年後に、プロティノスがプラトンの「イデア－精神的美－感性的快」という欲望の審級を世界の存在の審級に置き換えた。しかし、プラトンとプロティノスを読み比べてみれば、後者においてはプラトンにおいて生き生きと動いていた欲望論的動機が死に、根源的存在から世界の一切を説明しようとする知的体系への動機がその代わりになっていることがよくわかる。そして、現代のプラトン批判は、例外なくこのプロティノス化されたプラトン主義(新プラトン主義)への批判にすぎないことに気づいていない」

ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンはプラトン主義と新プラトン主義を語った。プレトンが語ったプラトン主義は、おそらく竹田氏の言説と同様で、それが「公共」を具現する。しかしプレトンが語った新プラトン主義はストア哲学に近い(ひょっとして、新プラトン主義の根底にストア哲学が存在するのかもしれない。その場合、竹田氏の新プラトン主義批判は妥当と言えない)。

スコラ哲学者たちが、黒死病は宇宙原理であると語っても、民衆は納得しない。それが宇宙原理なら、その宇宙原理とやらを改造する必要がある。必要なものは「発明」であり、発明のための「設計」である。

本文で述べたように、プレトンは「神」という言葉を使わず「神々」という言葉を使った。そして、おそらくビザンツの知＝公衆衛生を伝え、黒死病の難から逃れるために宇宙原理を改造することは正しい行為であると語った。さらにそのような新プラトン主義と竹田氏が言うようなプラトン主義をブレンドして都市共同体と農村共同体を渾然一体化した空間＝領邦国家の意義をおそらく語った(現実には、その後のフィレンツェとメディチ家は領邦国家トスカーナ大公国の建国を目指す)。

ところで、アタナシウス派キリスト教を国教化した後のローマでは、グノーシス主義は異端であり、古代ギリシャ哲学は異教である。フィレンツェの人々は、グノーシス主義やヘルメス文書等だけでなく、新プラトン主義やプラトン主義、数学や天文学も含めてギリシャ＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国から「輸入」した信仰や思想、技術を「グノーシス」と呼んだ。「グノーシス」という言葉には、黒死病に無力であったカトリック教会に対する皮肉が込められているように思う。

とはいえ、大きな問題が他にある。すでに述べたが、カトリック教会とギリシャ正教会の教義上のちがいはわずかである。にもかかわらず、ビザンツ帝国で古代ギリシャの哲学や数学が復活していた。ところが、その後の哲学者や宗教家たちは、そのような「中世ギリシャ」を十分考察することなくグノーシス主義の二元論やグノーシス主義と東洋思想の親和性等を論じている(「中世ギリシャ」を考察することなく東洋思想を語り、グノーシス主義を考察したユングはひどく滑稽である。だが、そのようなユングを高く評価する哲学者や宗教家が今も大勢いる)。

南宋とコムネノス朝ビザンツ帝国は、同時代に誕生したユーラシア大陸東西の「高度中世帝国」である。南宋は儒・道・仏の三教を融合する。コムネノス朝ビザンツ帝国も同様であった。すなわち、キリスト教とプラトン主義、新プラトン主義、グノーシス主義等々を融合した。

グノーシス主義は二元論であるが、マニ教のような善悪二元論ではない。善悪二元論はたいがい「善」を上位に置き、「悪」を下位に置く。したがって、全体の構造が一元論に収束する。「善」と「悪」をそれぞれ閉じた別世界に置き、外部に超越性を想定すればさしあたり二元論を貫くことができる。グノーシス主義の二元論はそのような二元論である。

グノーシス主義では、物質世界と精神世界をまったく異なる原理の世界であると考え、明確に二分する。肉体と精神を持つ人間はふたつの異なる世界への同居を強いられる。だが、そのような二元論は、他に類例がないと言えるほどの特異な二元論なのか。道学＝朱子学の「気」の考えは、人間に物質世界と精神世界への同居を強いるという点でグノーシス主義に似ている。あるいはコンピュータとインターネット、人工知能等が作り出す現代の「仮想現実(バーチャルリアリティ)」もグノーシス主義に似ている。

グノーシス主義は地球破壊を目的とする信仰であったと言う人もいる。だが、キリスト教と同時代に誕生したグノーシス主義の目的は、国教と国教会の破壊であったと考えたい。グノーシス主義と商品経済は無関係であるが、商品経済が高度化して国法を制定したビザンツ帝国で、国教会が金融経済上の役割を喪失し、国教が最高法規から世俗信仰に変遷した。そのようなビザンツ帝国で「融合」が具現したように思う。

コラム56: エンゲルスの歴史観とマルクスのプラグマティズム

フリードリヒ・エンゲルスは1844年に「イギリスにおける労働者階級の状態」を書き上げ、1850年に「ドイツ農民戦争」を書き上げている。エンゲルスが生まれたのは1820年なので、彼は24歳と30歳のときに二冊の著作を書き上げたわけだが、この二冊の著作に関してのみ、筆者はエンゲルスを高く評価したい(その後のエンゲルスは、商売が忙しくて運動から離れたためであると思うが、史的唯物論や科学的社会主義などといった論考に没頭する)。

最初に「産業革命」という言葉を使ったのは経済学者のジェローム＝アドルフ・ブランキで、貧民支援活動家のアーノルド・トインビー(著名な歴史家アーノルド・ジョセフ・トインビーの叔父)が学術用語として確立した。だが、「産業革命」という言葉を広めたのはエンゲルスである。

エンゲルスは、アーノルド・トインビーを尊敬していた。トインビーは産業革命のはじまりを「ジョージ3世の頃」と著書に書いたようだが、エンゲルスも産業革命の起点を「ジョージ3世の頃」に置いている。すなわち、18世紀後半に置いている。そして資本主義の起点も18世紀後半に置いている。

しかしマルクスは、産業革命の起点を16世紀後半の「初期産業革命」期に置いた。そのため、マルクスは著書「資本論」で産業資本以前の資本形態、すなわち商人資本にも言及した。

とはいえ、ヨーロッパで奴隷制が消滅したのは18世紀後半で、プロレタリアート＝労働者階級が誕生したのは奴隷制が消滅した後である。筆者は、たとえ産業革命の起点を16世紀後半に置いたとしても、マルクスもエンゲルス同様、資本主義経済の起点を18世紀後半に置いたと考える。

(労働力商品の下で資本主義経済を考察するのであれば、12～13世紀は論外であるとしても、ウォラーステインが言うように、15世紀後半に資本主義経済の起点を置くこともできない。ちなみに、奴隷制が消滅しても奴隷的存在が消滅したわけではない。「奴隷」は今も存在する)

筆者は、二十代の頃に「資本論」第1巻を読んだ。そして、大きな疑問をひとつ抱いた。筆者が抱いた大きな疑問は、マルクス経済学者にはどうでもよいことかもしれないが、マルクスが麻糸と麻布を商品の例にして「資本論」第1巻を書きはじめた、ということである。当時の筆者は、マルクスが綿織物や毛織物、絹織物ではなく、麻糸と麻布を商品の例に選んだ理由がさっぱりわからなかった(19世紀のイギリスでは、労働者も木綿＝コットンの服を着ていた)。

最近になってようやくわかった。筆者の認識では、マルクスは経済空間の順序構造を見落とした。しかし位相構造と代数構造の重畳に気づいていた。マルクスは、はじめに位相構造＝商品経済を説明し、代数構造＝市場経済にだけ着目する古典経済学を打破しようとした。読者に位相構造を理解してもらうには、商品の例は麻糸や麻布のほうがよいのである。すなわち、衣服だけの素材より船舶のロープや帆布、あるいはテーブルクロスや絵画のキャンパスでも使用する素材を例にするほうが位相構造＝サプライチェーンを理解しやすい。

(1853年、マシュー・ペリーが日本に来航して幕府に開国を迫ったが、彼が乗船していた黒船＝サスケハナ号はイギリスで建造した当時の最新鋭艦船である。サスケハナ号は外輪式蒸気機関と煙突を備えていた。しかし帆布を上げるマストも3本備えている。すなわち、「機帆船」であった。マルクスが生きていた時代の船舶は、最新鋭の船舶も機帆船である。船舶からマストがなくなるのは20世紀以降である。マルクスが生きていた時代の麻糸は、現代の化学合成繊維のような用途の広い素材であった)

ところで、一部の歴史家が、「マルクスの歴史観は進歩主義的歴史観である」と述べ、しばしばマルクスを非難する。だが、もしもマルクスが進歩主義的な歴史観を持っていたとすれば、マルクスは商品の例を綿糸や綿布にして「資本論」第1巻を書いたはずである。少なくとも、「資本論」第1巻を書いていた頃のマルクスはプラグマティストであった。進歩主義的歴史観を持っていたのはエンゲルスである。

社会学者や人文学者の多くが、マルクスは天才でエンゲルスはマルクスの良き友人であったと論じている。現実には、エンゲルスはマルクスの良き理解者であり、良き友人でもあった。だが筆者は、マルクスは努力の人であったと思う。天才だったのはエンゲルスである。天才はミスをする。筆者は、史的唯物論や科学的社会主義は「天才」のミスであったと考える。

(人間社会の階級形成を説明する上で、史的唯物論は有効である。しかし政府の社会福祉政策等が階級関係を緩和する。エンゲルスも気づいていたようだが、階級闘争だけで階級をなくすことはできない。余談であるが、若い頃のエンゲルスの顔写真と若い頃のスティーブン・ジョブズの顔写真がよく似ている。ジョブズもたくさんミスをした)

コラム57: 「ユートピア」

ルネサンス運動期に活躍した芸術家や人文学者は多い。トマス・モアもその一人である。トマス・モアの著書「ユートピア(岩波書店)」はラファエル・ヒスロデイという架空の人物が語る架空の国＝ユートピアの話であるが、面白いのはユートピア国の説明よりヒスロデイと他の人々との会話である。「ユートピア」で、モアの友人ピーター・ジャイルズが以下のように述べ、ヒスロデイを紹介する。

「たしかに航海はしたのですが、それも、あのバリヌルスのような船乗りとしてでなく、賢王ユリシーズ、いや先哲プラトンのような人間として、といった方がよいかもしれません。つまり、こうなんです。このラファエル・ヒスロデイさんは、ラテン語もよくお出来になるのですが、ギリシャ語の方も勘能な人なんです。それというのも、哲学の研究に専心没頭されたからで、ラテン語よりギリシャ語の方にいっそう精をだされたからでしょう。哲学の研究という点からいえば、少数のセネカやキケロのものをのぞいたら、あといくらかも重要なものはラテン語にはないということ、この方も知っておられたからでしょう」

トマス・モアが「ユートピア」を刊行したのは1516年で、フィレンツェ公会議の約77年後である。その頃は、プラトンの著作が各国語に翻訳され、イングランドでは知識人の座右の書になっていた(あるいは、オクスフォード大学やケンブリッジ大学の必読書になっていた)。

「ユートピア」を刊行した後、トマス・モアはヘンリー8世に仕え国政に尽くす。だが1535年6月、俗人である国王がイングランド国教会の最高長となる法＝国王至上法の制定に反発したジョン・フィッシャーが処刑され、約1ヵ月後にトマス・モアも処刑された。

トマス・モアはデジデリウス・エラスムスと親交が深かった。そして、エラスムス同様、教会改革が必要であると考えていたが、過激な宗教改革に反発していた、と言われている。だが「ユートピア」を読む限り、モアにとって信仰は大きな問題ではなかった、という気がする。モアの関心は「公共」であり、どのような公共を具現するかが大きな問題であったように思う。

ユートピア国は国王が存在しない「共産国家」である。以下は「ユートピア」の抜粋であるが、最初の共産主義者はモアである。

(ちなみに、プラトンも著書「国家」や「法律」で私有財産を否定しているが、プラトンが否定したのは私有財産ではなく「財」そのものである、と筆者は考える。古代社会は、「富」と「財」が分離していた。そして、プラトンの考えにしたがえば、「富」の派生物にすぎない「財」が「富」を凌駕して「富」を支配することは、あってはならない)

「私は、プラトンの意見に賛意を表せざるをえません。そして、プラトンが、すべての人が富と便益の平等な分配を享有することを規定する法律を拒否した者たちの為に、法律を作ろうとしなかったことを、もっともなことと思います。プラトンの慧眼はよく、あらゆるものの平等が確立されれば、それこそが民衆の幸福への唯一の道である、と見抜いていたのです。そして、この平等ということは、すべての人が銘々自分の私有財産を持っている限り、決して行われるべくもないと私は考えます。いろいろな権利や口実を設けては、出来るだけ多くのものをよせ集め掻き集め、ありとあらゆる富は少数の者たちだけで山分けにする、そのような国では、いくら豊富に貯えがあっても、少数の者以外の者にはただ欠乏と貧窮が残されるばかりです。しかも、多くの場合、この後者の貧乏人の方が前者すなわち金持ちなどよりもいっそう幸福な生活を楽しむ権利があるのです。なぜかと申しますと、金持ちは貪欲で陰険で非生産的であります。貧乏人は謙虚で純粋で、日々労働によって自分の利益そのものよりむしろ全体の福祉に多大の貢献をしているからです」

(柄谷行人氏は、筆者と異なる切り口でモアの思想を考察し、「ユートピア」を高く評価しておられる。他方、モアが愛読したプラトンの著作、とりわけ「国家」や「法律」を高く評価していない。すでに述べたが、筆者はプラトンやアリストテレスの著作はサーサーン朝ペルシャとアッバース朝イスラーム帝国下で中世風に改竄されたと考える。むしろモアが愛読したプラトンの「国家」や「法律」も改竄されていた。しかし、モアは新プラトン主義に精通し、おそらくストア哲学にも精通していた。ユートピア国では、奴隷も市民と同等の権利を有する。当時において、そのような平等主義＝共産主義は新プラトン主義とストア哲学に由来する、と言うしかない。柄谷氏は、モアのそのような側面を見抜いておられるように思う。「ユートピア」を読むことを通して新プラトン主義とストア哲学を考察した柄谷氏に、プラトンの「国家」や「法律」を評価する必要はない)

トマス・モアは、プラトン主義者で、最初の共産主義者である。彼の死後、イングランドはパレオロゴス朝ビザンツ帝国によく似た形態の国家(準国民国家)になるが、実現したのはモアと敵対したプロテスタントのトマス・克蘭マーである。

筆者は、モアが私有財産を否定したのは、ビザンツ帝国が発明した「所有権」を導入して人間＝農民を支配し、同時に土地＝農地も支配する体制を否定するためであったと考える。だが、他の西ヨーロッパ諸国同様、イングランドでも商品経済が進展していた。支配者層だけでなく、民衆も「所有権」を必要としていたのかもしれない。トマス・克蘭マーにとって、ビザンツ帝国の模倣はセカンドベストの選択だった。

(中世社会は、人間を支配するスキームと自然を支配するスキームが異なっていた、と筆者は考える。しかし近代社会では、支配者層は人間の支配を通して自然も支配する。だが、過去の共産主義者や社会主義者たちは、僅かな例外を除けば、そのような視点で所有権や私有権を考察していない。筆者の認識では、トロツキー主義は「大きなスターリン主義」である。スターリンの独裁がなくても、ソビエト連邦が国家社会主義化するのには必然であった。他方、資本主義者たちは、所有権や私有権を「自然法」の範疇に置いているように見える。彼らは、商品所有権や財産私有権の問題は、経済問題以上に政治問題であることに気づいていない)

モアの思想(あるいは理想)は実現しなかった。だが、モアを殺してもモアの思想や信条は殺せない。その後のイングランド＝イギリスは支配者層が革命に怯え、民衆が共産主義や社会主義に希望を抱く国家になる(私見であるが、清教徒革命下で平等派＝レヴェラーズから分離した「真の平等派＝ディガーズ」や後の空想的社会主義者たちはモアの思想の具現を試みた)。

筆者の考えでは、資本主義が経済空間の代数構造＝市場経済を揺るがし、社会主義が位相構造＝商品経済を揺るがす。そして、共産主義が順序構造＝貨幣経済を揺るがす。とはいえ、本書で順序構造＝貨幣経済の矛盾や改革の必要を論じるつもりはない。すなわち、本書で資本主義や社会主義を論じる場面はあるが、共産主義あるいは共存主義等を論じる場面はない。共産主義を知りたい人は「ユートピア」を読めばよい。

資本主義と社会主義を考案したのはイングランド＝イギリスで、平等主義＝共産主義を考案したのもイングランド＝イギリスである。そして、思想としての平等主義＝共産主義は資本主義より古いし、社会主義より古い。

平等主義＝共産主義については、「古い」という点だけを強調したい。資本主義の次に社会主義が具現し、社会主義の次に平等主義＝共産主義が具現するという史的唯物論の考えは、戦略であって科学ではない。

8.6 オスマン帝国の再興

1402年のアンカラの戦いでオスマン軍がティムール軍に大敗し、バヤズイト1世が捕らえられ、その後死去する。オスマン帝国の版図が縮小し、バヤズイト1世の四人の息子たちが縮小した版図を分断して対立した。

だが1413年、次男のメフメトが兄弟を全員殺害してスルターン(メフメト1世。在位1413~1421年)に即位する。即位後、メフメト1世は各地の反乱を鎮圧し、分断したオスマン帝国を再統一する。他方、ビザンツ帝国との友好を維持した。

メフメト1世の死後、彼の長男ムラトがスルターン(ムラト2世。在位1421~1451年)に即位する。オスマン軍がコンスタンティノープルを一時包囲する場面もあったが、ムラト2世もビザンツ帝国との友好を維持した。

他方、1428年にゲルミヤン侯国を併合してアナトリア半島西部の「失地」を奪還する。そして1444年のヴァルナの戦いでハンガリー軍を撃退し、さらに1448年のコソヴォの戦いでも大勝してブルガリアを含むバルカン半島東部を支配する。

約半世紀続いたメフメト1世とムラト2世の治世下で、オスマン帝国が再興した。ムラト2世の死後、彼の長男メフメトが弟のアメフトを殺害してスルターン(メフメト2世。在位1451~1481年)に即位する。そして1453年、コンスタンティノープルを攻略し、名実ともにビザンツ帝国を滅ぼす。その後メフメト2世率いるオスマン軍はベオグラード(現在のセルビア共和国の首都)に侵攻するが、フニャディ・ヤーノシュ率いるハンガリー軍に大敗する(コラム58)。

とはいえ、コンスタンティノープルを攻略したメフメト2世は活発であった。メフメト2世はワラキア公国とモルタヴィア公国(概ね現在のルーマニアとモルドバ共和国)を支配し、さらにベオグラードを除くセルビアとボスニアの大部分を支配してバルカン半島の版図を拡大する(ただし、モルタヴィア公国の支配は失敗する)。その後ペロポネソス半島を支配し、ヴェネツィア領レスボス島とエヴィア島(ネグロポンテ)を占領する。そしてアナトリア半島北部のトレビゾンド帝国を併合し、アナトリア半島中部のカラマン侯国に侵攻した。

カラマン侯国は白羊朝(アク・コユル。首都はタブリーズ)に援軍を要請する。1473年、メフメト2世率いるオスマン軍がアナトリア半島東部のオトゥルクベリでウズン・ハサン率いる白羊朝軍と激突した。戦闘はオスマン軍の大勝であった。

その後メフメト2世はクリミア・ハン国を併合し、さらにアルバニアを征服する。黒海の独占的通商権を喪失したジェノヴァは一時衰退し、隣接するアルバニアを征服されたヴェネツィアは危機に陥る。1479年、ヴェネツィアはレスボス島とエヴィア島の領有権を放棄し、メフメト2世と講和する。その後メフメト2世は聖ヨハネ騎士団が立てこもるロードス島に侵攻するが、1481年に死去する。メフメト2世の死後、彼の長男バヤズイトがスルターン(バヤズイト2世。1481~1512年)に即位する。

(12世紀まで、レスボス島とロードス島、エヴィア島とクレタ島はビザンツ帝国の領地であった。しかし第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後、ヴェネツィアがレスボス島とエヴィア島、クレタ島を領有する。そして14世紀に聖ヨハネ騎士団がロードス島を占領した。他方、ヴェネツィアは1498年にキプロス島も領有している。しかし15世紀後半、オスマン帝国がレスボス島とエヴィア島を占領し、16世紀にロードス島とキプロス島、17世紀にクレタ島も占領する。ちなみに、現在のレスボス島とロードス島、エヴィア島とクレタ島はギリシャ共和国の領土である。レスボス島とロードス島の面積は沖縄本島の約6~7割、エヴィア島の面積は約1.5倍、クレタ島の面積は約3.7倍である。キプロス島はクレタ島より少し大きい)

メフメト2世は約30年在位したが、バヤズイト2世も約30年在位する。バヤズイト2世の代にオスマン帝国はモルタヴィア公国を再度支配したが、外征上の成果はそれだけである。しかしバヤズイト2世はメフメト2世の代に拡大した版図を整備し、中央集権体制を確立した。そして財政を立て直す。

他方、スンナ派勢力が増大してイスラーム法学者(ウラマー)が国政に関与しはじめる。異教やシーア派への寛容が喪失し、1511年に反乱(シャー・クルの反乱)が勃発した。1512年、バヤズイト2世の三男セリムが父を廃位してスルターン(セリム1世。在位1512~1520年)に即位する。ちなみに、バヤズイト2世もセリム1世も兄弟を全員殺害している。

即位後、セリム1世はハンガリー王ウラースロー2世と和睦し、東征をはじめ。1514年、セリム1世率いるオスマン軍がアナトリア半島東部のチャルディランでイスマール1世率いるサファヴィー朝ペルシャ軍と激突した。オスマン軍はサファヴィー朝ペルシャ軍を撃破し、タブリーズを一時占領する。そして小アジア全域と現在のイラク北部(クルディスタン地方)を支配する。その後シリアに侵攻し、1516年のマルジュ・ダービクの戦いでマムルーク朝ムスリム軍に大勝する(サファヴィー朝ペルシャ軍との戦闘でもマムルーク朝ムスリム軍との戦闘でも、オスマン軍は小銃と大砲を活用した。サファヴィー朝とマムルーク朝の騎馬兵団は壊滅する)。そして1517年、カイロを攻略してマムルーク朝を滅ぼし、シリアとパレスチナ、エジプトを支配する(コラム59)。

(マムルーク朝を滅ぼした場面で、セリム1世はカイロ・アッバース朝カリフ=ムタワッキル3世を保護するが、ムタワッキル3世は嫡子を残すことなく死去する。カイロ・アッバース朝カリフの血統が断絶し、他方、オスマン帝国が紅海沿岸の聖地メッカとメディナを保護下に置く。そしてスルターンがイスラーム世界の盟主になる。これが、スルターン=カリフ制のはじまりであるが、オスマン帝国崩壊後のイスラーム世界にスルターンもカリフも存在しない)

セルム1世の代に、オスマン帝国は小アジア全域と現在のイラク北部、シリアとパレスチナ、エジプト、北アフリカやアラビア半島の一部を支配した。その後セルム1世はロードス島遠征を準備するが、1520年に死去する。セルム1世の死後、彼の嫡子スレイマンがスルターン(スレイマン1世。在位1520～1566年)に即位する。兄弟がいなかったためであるとの説もあるが、スレイマン1世は「兄弟殺し」を行わなかった。そして立法者を超える「絶対君主」としてオスマン帝国に君臨する(コラム60)。

コラム58: その後のハンガリーとポーランド

ジギスムントの死後、オーストリア公アルブレヒトが神聖ローマ皇帝アルブレヒト2世に即位してハンガリー王を兼ねたが、約2年後に死去する。彼の死後、ポーランド王ヴワディスワフ3世がハンガリー王ウラースロー1世に即位する。即位後、ヴワディスワフ3世＝ウラースロー1世はオスマン軍と戦うが、ヴァルナの戦いで戦死する。ハンガリー軍はコソヴォの戦いでもオスマン軍に敗戦した。

その後ハンガリー貴族フニャディ・ヤーノシュがムラト2世と休戦協定を結ぶ。ヤーノシュはアルブレヒト2世の嫡子ラディスラウス・ポストウムスをハンガリー王に推戴し、ポストウムスはハンガリー王ウラースロー5世に即位する。しかしハンガリーの執政はヤーノシュが担った。

ヤーノシュは休戦協定を遵守する。1453年にオスマン軍がコンスタンティノープルを包囲した場面でも、ヤーノシュは休戦協定を遵守してビザンツ帝国への援軍を拒否する。だがコンスタンティノープル攻略後、メフメト2世は矛先をハンガリーに向ける。しかしベオグラードの戦い(1456年)でヤーノシュ率いるハンガリー軍に大敗する(ベオグラードの戦いは、民兵を中心とするゲリラ軍が大軍に大勝した戦いであった)。ヤーノシュはオスマン軍を撃退した約半月後に死去し、翌1457年、ウラースロー5世も死去する。

ウラースロー5世の死後、ヤーノシュの次男マーチャーシュがハンガリー王マーチャーシュ1世に即位する。彼はボヘミアを併合し、ハンガリーの版図を最大化したが、嫡子を残すことなく1490年に死去する。

ヤーノシュもマーチャーシュ1世も軍事と政治の両面で卓越した人物であった。両名ともハンガリーの国民的英雄になり、様々なエピソードを残すが、とりわけマーチャーシュ1世がワラキア公ヴラド3世を幽閉した事件は有名である。ヴラド3世はヤーノシュに従軍してオスマン軍と戦い、自領内でもゲリラ戦を展開してオスマン軍を苦しめた。しかしオスマン帝国と内通した弟のラドゥが彼を追放する。ヴラド3世はハンガリーに亡命したが、面首を保ちながらオスマン軍との戦闘を回避しようとしたマーチャーシュ1世はヴラド3世を幽閉して彼の「残虐行為」を吹聴する。マーチャーシュ1世のプロパガンダのおかげで、ヴラド3世は「ドラキュラ」にされてしまう。

他方、マーチャーシュ1世はカトリックへの改宗を条件に彼の妹マーリアとの結婚を認めた。カトリックに改宗してマーリアと結婚し、釈放されたヴラド3世はワラキアに戻り再度オスマン軍と戦うが、1476年頃に死去する。ちなみに、ヴラド3世は夜襲を仕掛けてメフメト2世を後一歩のところまで追い詰めたことがある。また、戦死したオスマン兵の死体を串刺しにして並べ、メフメト2世とオスマン兵の戦意を喪失させたりしている。ヴラド3世は智将であった。マーチャーシュ1世は、おそらく本人の承諾を得てヴラド3世を「ドラキュラ」に仕立てたと思う。オスマン兵たちは「ドラキュラ」を畏怖した。

ヴワディスワフ3世＝ウラースロー1世の死後、ポーランドでは彼の弟カジミェシュがポーランド王カジミェシュ4世に即位する(ちなみに、ウラースロー1世もカジミェシュ4世もタンネンベルクの戦いで大勝したヨガイラ＝ヴワディスワフ2世の実子である)。カジミェシュ4世は「13年戦争」でドイツ騎士修道会を撃破し、ポーランド・リトアニア同君連合の基礎を固めた。そしてマーチャーシュ1世の死後、彼の長男がハンガリー王ウラースロー2世に即位する。

ウラースロー2世がオスマン軍と戦う場面はなかった。彼は悪化した財政と拡大した版図の統治に苦慮する。そして、バヤズィット2世と10年間の休戦協定を結び傭兵を解雇した。ウラースロー2世の死後、彼の嫡男ラヨシュがハンガリー王に即位するが、1526年のモハーチの戦いでオスマン軍に大敗して戦死する。

モハーチの戦い後、ハンガリーは東西に分裂した。オスマン帝国が東ハンガリー(パンノニア平原と現在のルーマニア、およびモルドバ共和国)を支配し、神聖ローマ帝国が西ハンガリー(ボヘミアやスロヴァキア、クロアチア等)を支配する。そして1570年、東ハンガリーがハンガリー王位を放棄してトランシルヴァニア公国になり、オーストリア大公フェルディナント(後の神聖ローマ皇帝フェルディナント1世)がハンガリー王に即位する。

他方、「13年戦争」でドイツ騎士修道会を撃破したポーランド・リトアニア同君連合は安泰であった。カジミェシュ4世の死後、ウラースロー2世の三名の弟(ヤン1世、アレクサンデル、ジグムント1世)が王位を継承する。そしてジグムント1世の嫡男ジグムント2世の代に「ポーランド・リトアニア共和国」に変貌する。

1572年、ジグムント2世が死去し、ポーランドとリトアニアの貴族たちは国王自由選挙を行いフランス王シャルル9世の弟アンリを国王に選出した。しかしフランス王シャルル9世が死去し、アンリは帰国してフランス王アンリ3世に即位する。ポーランドとリトアニアの貴族たちは再度国王自由選挙を行い、トランシルヴァニア公バートリ・イシュトヴァーン＝ステファン・バートリを新国王に選出する。

コラム59: サファヴィー朝ペルシャ

14世紀前半、イル・ハン国はチョバン朝とジャライル朝に分裂するが、キプチャク・ハン国がチョバン朝を滅ぼし、ティムール帝国がジャライル朝を滅ぼす。ティムールの死後、黒羊朝(カラ・コユンル。首都はタブリーズ)がイル・ハン国の版図を支配し、ティムール帝国に迫る場面が一時あった。しかしアルメニアで誕生した白羊朝(アク・コユンル)が東征して黒羊朝を滅ぼす。だが、オトウルクベリの戦いでオスマン軍に大敗し、その後サファヴィー教団が白羊朝を滅ぼす。

1501年、サファヴィー教団の教主イスマーイール1世は拠点をアルダビールからタブリーズに移し、「サファヴィー朝ペルシャ」を開国する。他方、1500年にキプチャク・ハン国から分離独立したウズベク・ハン国＝シャイバーニー朝がサマルカンドを占領し、ティムール帝国を滅ぼす。シャイバーニー朝はトランスオクシアナ地方を支配し、ホラーサン地方に侵攻した。だが、サファヴィー朝ペルシャ軍がシャイバーニー朝軍を撃退する。

前章のコラム49で述べたように、サファヴィー教団の開祖サフィー・アッディーンはイスラーム教スンナ派に属していた。しかし、イル・ハン国は第7代君主ガザンがイスラーム教に改宗した後、第8代君主オルジェイトウがシーア派十二イマーム派に改宗している。タブリーズにしたサファヴィー朝ペルシャの国教もシーア派十二イマーム派になる。

サファヴィー教団が誕生した古都アルダビールはゾロアスター教の聖地である。そして、モンゴル軍が侵攻するまで、ゾロアスター教を守り続けていた。モンゴル兵が多数の住民を殺害し、アルダビールのゾロアスター教徒が消滅した、と伝えられている。

だが、イル・ハン国のモンゴル兵は大多数がペルシャ人である。彼らが同胞を殺戮するとは考えにくい。筆者は信仰に疎いが、アルダビールのゾロアスター教徒が生き残り、その影響下でサファヴィー教団に神秘主義が生じ、それがシーア派十二イマーム派に伝播したような気がする(現在のアルダビールは人口42万を超えるイランの地方都市で、住民の大多数がアゼルバイジャン人である。周辺は湖と温泉が豊富で、最大の湖シューラービール湖の面積は琵琶湖とほぼ同じである)。

1514年のチャルディランの戦いでオスマン軍に大敗した後、イスマーイール1世は酒に溺れ1524年に死去する。イスマーイール1世の死後、彼の嫡子タフマースプ1世が「諸王の王」に即位した。

タフマースプ1世はゲリラ戦でオスマン軍に抵抗する。そして1555年、オスマン帝国と平和条約を結ぶ。サファヴィー朝ペルシャはバグダートを含むメソポタミアを喪失したが、タブリーズやアルダビールを奪還し、オスマン帝国との国境を確定して西方の安全を確保した。

1576年、タフマースプ1世が死去し、その後内乱が勃発する。そして1588年、アブドゥッラーフ2世率いるシャイバーニー朝軍が再度サファヴィー朝ペルシャに侵攻し、ホラーサン地方を奪取する。

その後シャイバーニー朝はジャーン朝＝アストラハン朝に変遷し、1785年まで続く。他方、サファヴィー朝ペルシャはアッバース1世(在位1588～1629年)の代に再興し、1736年まで続く。ちなみに、サファヴィー朝ペルシャはタフマースプ1世の代にタブリーズからガズヴィーンに遷都している。そして、名君アッバース1世の代にガズヴィーンからテヘラン近郊のエスファハーンに遷都した。

コラム60: オスマン帝国と海賊

モルタヴィア公国を再度支配した場面で、オスマン帝国に黒海の海上も支配する必要が生じた。しかし当時のオスマン帝国は自前の海軍を編成できない。そこで、バヤズィト2世は海賊を活用する。

(バヤズィト2世の代のオスマン海軍提督ケマル・レイースは海賊である。セリム1世に献上した「地図」と航海書で有名なピーリー・レイースは彼の甥で、ケマル・レイースに従軍して戦っている。スレイマン1世の代にバルバロス・ハイレッディンがオスマン海軍の提督になったが、ピーリー・レイースは彼の下でも活躍した)

セリム1世の代に、シリアとパレスチナ、エジプトを支配したオスマン帝国は黒海だけでなくエーゲ海とイオニア海の海上も支配しなければならなくなる。そして、スレイマン1世の代に紅海とペルシャ湾、アラビア海の海上も支配しなければならなくなる。オスマン艦隊は地中海でハプスブルク艦隊等と交戦し、紅海やペルシャ湾、アラビア海でポルトガル艦隊と交戦した。したがって海賊の活用はバヤズィト2世の代以上に活発化する(オスマン帝国が自前の海軍を編成するのは1571年のレバント海戦で大敗した後である)。

ところで、作家の塩野七生氏が、著書「ローマ亡き後の地中海世界(新潮文庫)」でオスマン帝国と海賊の関係を存分に書いておられるが、塩野氏はオスマン帝国が海賊を活用した理由をもっぱらコストの問題に置き換えている。だが、オスマン帝国は「帝国」である。海賊であっても皇帝＝スルターンは臣従を受け入れることも命じることもできる。

それでも塩野氏の歴史観は公平で信頼できる。たとえば、一部の歴史家や社会学者が、レバント海戦後からオスマン帝国の衰退がはじまったと論じているが、塩野氏はそのような歴史観を退けている。筆者も同感である。オスマン帝国は、レバント海戦後から衰退したように見えるだけである。レバント海戦はフランスの歴史家フェルナン・ブローデルが言うほどの「大事件」ではない。

海戦でオスマン帝国に打撃を与えたのはポルトガルである。1509年、フランシスコ・デ・アルメイダ率いるポルトガル艦隊がディーウ沖海戦でムスリム連合艦隊に勝利する。その後アルメイダはポルトガル副王の地位を得、ホルムズ海峡を支配してオスマン帝国のインド洋進出を阻んだ。

(ポルトガルが建造したキャラック船やガレオン船は、多数の大砲を積んでいた。しかしムスリム連合艦隊の主力船(ヴェネツィアが建造したガレー船)は多数の大砲を積めない。ディーウ沖海戦後、オスマン艦隊がポルトガル艦隊に何度も海戦を挑むが敗退する。とはいえ、アラビア半島の西南端、紅海入り口付近のアデンをポルトガル支配から解放した。おかげでアジア商人の商船が胡椒や香料をエジプトに輸送できるようになる。ヴェネツィア商人がそれら胡椒や香料をヨーロッパで販売した。ちなみに、オランダが建造したフライト船はキャラック船やガレオン船よりマストが高い。したがって、フライト船の船速はキャラック船やガレオン船を凌駕する。オランダの初期産業革命がキャラック船やガレオン船よりマストの高いフライト船の建造を可能にしたように思う)

他方、陸戦でオスマン帝国に打撃を与えたのはサファヴィー朝ペルシャである。サファヴィー朝ペルシャ王アッバース1世(在位1588～1629年)は1589年にシャイバーニー朝からホラーサン地方を奪還し、その後西征してオスマン帝国からタブリーズやアルダビールを含むイラン領アゼルバイジャンを奪還する。そして1623年にバグダードを占領し、「サーサーン朝ペルシャ」の版図を一時再現した。

アッバース1世の代に「シャーナメ」や「シーリーン」が民衆の物語になり、サファヴィー朝ペルシャは最盛期を迎える。だがアッバース1世の死後、オスマン帝国が国力をかけてバグダードを含むメソポタミアを奪還する。しかしホルムズ海峡付近まで侵攻できなかった。オスマン海軍はペルシャ湾内に止まる。

(その頃は、イギリス東インド会社がホルムズ海峡付近の港湾都市バンダレ・アッバースに商館を置き、海上と陸上の防衛体制を築いていた。オランダ東インド会社やフランス東インド会社もバンダレ・アッバースに商館を置いている。ポルトガルがインド洋に進出した経緯やイギリス東インド会社がバンダレ・アッバースに商館を置いた経緯は後述する。現在のバンダレ・アッバースの人口は約27万で、イラン・イスラーム共和国の中核都市として栄えている)

つまるところ、初期産業革命と無縁なヴェネツィアの技術では、地中海を航行する程度の船舶しかつくれなかった。したがって16～17世紀のオスマン海軍は、ポルトガル海軍やイングランド海軍と互角に戦える艦船を所有していない。オスマン海軍が大洋を航行する艦船を所有するのはかなり後の時代になる。

ポルトガルとサファヴィー朝ペルシャ、イングランド＝イギリスに東方進出を抑え込まれたオスマン帝国は「内陸帝国」化し、1683年の第二次ウィーン包囲戦でポーランド・リトアニア王ヤン3世ソビェツキ(在位1674～1696年)率いるヨーロッパ連合軍に大打撃を被り衰退するが、イスラーム世界の盟主としての地位を維持し続けた。すなわち、イスラーム世界では、スルターン＝カリフ制の時代が長く続く。

8.7 明朝と李氏朝鮮王朝の誕生

「広義の近代」の出現期後半(14世紀後半～16世紀後半)の皇帝や国王は、概ね国法を制定して執行する「立法者」であった。とはいえ、彼らが進歩して立法者になったわけではない。商品経済の下で、彼らは財貨を鑄造して発行する必要に迫られた。そして既存の法体系＝慣習法体系に代わる新たな法体系＝国法体系を構築し、執行権＝行政権を行使する必要に迫られた。

14世紀後半～16世紀後半のヨーロッパでは、統治者の大半が立法者であることを強いられたが、アジアでも皇帝や国王が立法者であることを強いられた。とはいえ、立法者を超える「立法者」として君臨する。すなわち、自身が最高法規になり、「絶対君主」として君臨する。

(ポーランド・リトアニア共和国のような例外もあるが、ヨーロッパでも16世紀後半から皇帝や国王が最高法規＝絶対君主として君臨し始める。歴史家の多くが、それを「絶対主義」と呼び、絶対主義体制下の絶対君主を「立法者」と呼ぶ場合がある。しかし本書では、前章で「立法者」という言葉多用し、自身が最高法規となる前の皇帝や国王であっても、国法を制定して執行する皇帝や国王を「立法者」と呼んだ。以後、「絶対君主」という言葉多用するが、筆者の認識では、国教の一元が遅れたアジア、すなわち明朝期の中国が国教を一元した場面で「絶対主義」も発明した)

1351年、河南と湖北で紅巾の乱が勃発する。また江南でも元朝に抗する軍閥が跋扈した。そして1368年、紅巾の乱の下で台頭した朱元璋(洪武帝。在位1368～1398年)が江南の軍閥を制圧し、南京で明朝を開国する。開国後、朱元璋＝洪武帝は北伐を開始する。元朝は大都と上都を放棄してモンゴル高原に逃れた(以後、元朝を「北元」と呼ぶ)。

秦漢時代から元朝期まで、中国の王朝は皇帝の下に三つの主要機関を置く体制を敷いていた。隋朝と唐朝は三つの主要機関＝三省(中書省、門下省、尚書省)を三層化し、尚書省の下に六部(吏部、戸部、礼部、兵部、刑部、工部)を置く体制を敷いた。北宋や南宋も隋唐時代の「三省六部」体制を継承する。元朝は中書省の下に行中書省を置き、行中書省の下に六部を置いた。そして門下省と尚書省をひとつにまとめ、樞密院を設置して三つの主要機関が鼎立する体制を敷いた。すなわち、元朝は「三省六部」体制を改良した。しかし明朝は「三省六部」体制を解体する。

1376年、歴史家たちは「空印の案」と呼んでいるが、洪武帝は収支報告に不正があるとの理由で各地の地方官を肅正する。宰相の胡惟庸と陳寧が「空印の案」を主導したが、肅正の目的は地方官の総入れ替えである。洪武帝は行中書省を廃止し、六部を中書省の直属にする。やがて中書省もなくなり、六部が皇帝の直属になる。明朝は三省を廃止して六部を「六省」に格上げし、皇帝の下に置いたとも言える(ちなみに、清朝もこの六部体制＝六省体制を継承した)。

「空印の案」の下で、胡惟庸と陳寧は1万名前後の地方官を処刑あるいは左遷した。その後新たな地方官が赴任するが、彼らは概ね道学＝宋学の学徒であった(以後、道学＝宋学を「朱子学」と呼ぶ)。新たに赴任した地方官は、朱子学＝国法の下で各地を統治する。

(南宋で三教が融合し、朱子学が誕生した。しかし朱子学は士大夫層の「学」になったが「法」になる場面はなかった。元朝期の中国でも、朱子学が「法」になる場面はなかった。元朝は科挙で朱子学を採用したが、有能な士大夫を官吏に登用するための便宜策にすぎない。しかし洪武帝は朱子学を明朝の「国法」にする。そして、自身が最高法規＝絶対君主として君臨する。李氏朝鮮も同様になるが、14世紀後半のアジアで絶対主義が誕生した。アジアの絶対主義はヨーロッパの絶対主義より約200年早い。すでに述べたが、オスマン帝国ではスレイマン1世の代からスルターンが絶対君主として君臨するようになる)

1380年、洪武帝は謀反を企てたとの理由で胡惟庸と陳寧を捕らえて処刑する。歴史家たちは、その後の郭桓の案や林賢事件、李善長の獄までの肅正を「胡惟庸の獄」と呼んでいるが、さらに1393年、歴史家たちが「藍玉の獄」と呼んでいる肅正が勃発する。ふたつの大肅正で数万の人々が処刑された。歴史家たちは、「胡惟庸の獄」と「藍玉の獄」を合わせて「胡藍の獄」と呼んでいる。

歴史家たちは、猜疑心の強い洪武帝が帝位篡奪を恐れたこと、また自身の嫡孫を即位させようとしたことが「胡藍の獄」の原因である、と論じている。その認識が正しいとしても、歴史家たちは「時代が洪武帝を狂わせた」と言わない。

しかし、洪武帝は自身が最高法規として君臨し、国法を制定して執行した。洪武帝が絶対君主として君臨したことと「胡藍の獄」は無関係ではない。筆者は、時代が洪武帝を狂わせた、と考えたい。

洪武帝の死後、彼の四男が帝位を篡奪して永楽帝(在位1402～1424年)に即位する。永楽帝は明朝の法治主義を進展させた。法治主義の下で、永楽帝は宦官を登用する。

宦官は秦漢時代から存在したが、皇帝の周囲で雑事を担う存在であり、彼らが文官や武官になる場面は稀であった。だが、永楽帝は有能な宦官を文官に登用する。明朝期から、宦官も朝廷の執政を担い、あるいは地方に赴任するようになる。

ところで、永楽帝が宦官の鄭和に大艦隊の建造を命じ、鄭和が指揮する大艦隊がインドやペルシャ、アフリカに遠征したことは有名であるが、その頃の南シナ海と東シナ海ではマラッカ(現在のムラカ市。シンガポールに近い)と琉球(現在の沖縄)が貿易の中継地として繁栄している。マラッカと琉球の繁栄は16世紀中頃まで続いた。また永楽帝は朝貢を「朝貢貿易」に改めた。すなわち、洪武帝がはじめた海禁政策を維持しながら貿易を皇帝直下に置く。

(永楽帝は足利義満を「日本国王」に冊封して倭寇と密貿易の取り締まりを求めている。足利義満は永楽帝の求めに応じ、朝貢貿易＝勘合貿易で多大な「利」を得た。ちなみに、鄭和が乗船した「宝船」は全長120メートル以上あったと伝えられている。だが、全長120メートル以上の木造船を建造するには全長120メートル以上の大木が少なくとも1本必要である。しかしそのような大木は存在しない。それでも「宝船」の全長が120メートル以上あったとすれば、当時の中国＝明朝は船底に竜骨＝キールを必要としない船体をつくる技術を有していたことになる。すなわち、鉄で船をつくる技術を有していたことになるが、筆者の想像では、二隻の大型木造船を縦に繋いで「宝船」と称したように思う)

他方、永楽帝は胡朝＝ベトナムに外征し、北元への外征を繰り返し替えた。そして外征の帰路で死去する。永楽帝の死後、彼の長男＝洪熙帝が即位するが、約1年後に死去する。その後洪熙帝の長男＝宣徳帝(在位1425～1435年)が即位し、約10年の在位期間中に明朝の体制を固める。

宣徳帝の死後、彼の長男＝正統帝が即位する。土木の変が勃発したが、明朝は絶対主義体制を護持した。皇帝が絶対君主として君臨し続け、明朝は弘治帝(在位1487～1505年)の代に最盛期を迎える(コラム61、コラム62)。

ところで、大都と上都を放棄してモンゴル高原に逃れた元朝皇帝は恵宗(トゴン・テムル)であるが、彼の正室＝奇皇后(キファンフ)は高麗が元に送った貢女である。奇皇后は恵宗に寵愛され、昭宗(アユルシリダラ)を出産する。

1353年、昭宗が皇太子に即位して元朝の執政を担い、高麗で奇皇后の一族＝奇氏の専横がはじまった。しかし1356年、第31代高麗王＝恭愍王(コンミンワン)が奇氏を討って胡服弁髪令を廃止し、元朝の高官を追放して鴨緑江以東の領土を奪還する。このとき、恭愍王の下で活躍した武人が崔瑩(チェ・ヨン)、および李子春と李成桂(イ・ソンゲ)の父子である。後に李成桂が恭愍王の子孫と崔瑩を殺害し、李氏朝鮮を開国する。

恭愍王は、しばしば韓流ドラマに登場するが、彼の人物像は虚実が入り混じっている。確実に言えるのは、彼が中原出身の妃(魯国公主)を溺愛したことである。理由は男女の情愛だけではない。おそらく、恭愍王は魯国公主や彼女の側近たちから朱子学を学び、絶対君主として高麗を再興しようとしていた。彼は李齊賢(イ・ジエヒョン)や李穡(イ・セク)のような朱子学者を登用して国政改革を推進する(朱元璋＝洪武帝が明朝を開国し、元朝がモンゴル高原に逃れた後、恭愍王は明朝に朝貢したが、この朝貢はいわゆる「事大主義」ではない。価値観を共有する国家間の同盟であったと思う)。

1374年、親元派の宦官が恭愍王を殺害する。恭愍王の死後、明朝の洪武帝が奪還した領土の返還を求めたため、高麗王朝は中国遠征を試みる。しかし無謀な遠征に反発した李成桂が首都開城(現在の北朝鮮ケソン市)を占領して高麗王と王族、崔瑩等を殺害し、李氏朝鮮王朝を開国する(日本に渡航して室町幕府から倭寇禁圧と高麗人釈放の確約を得た鄭夢周(チョン・モンジュ)は、高名な朱子学者であったが、高麗王朝の存続に尽力したため、李成桂の五男＝李芳遠に殺害された)。

高麗王朝滅亡後、李成桂を推戴した鄭道伝(チョン・ドジョン)が土地改革と漢城(現在のソウル市)への遷都、朱子学による法治主義(崇儒抑仏政策)等を断行する。鄭道伝の改革は軍制にも及んだ。そのため李成桂の五男＝李芳遠が鄭道伝を殺害する。

1398年、李成桂＝太祖は王位を次男に譲り、その次男＝定宗が弟の芳遠に禅譲する。そして1400年、鄭夢周と鄭道伝を殺害した芳遠が朝鮮王朝の太宗に即位する。太宗はさらなる肅正を行い、中央集権体制を強化した。他方、鄭道伝がはじめた土地改革と朱子学による法治主義を徹底し、その後明朝との関係を改善する。

1418年、太宗は三男＝世宗(在位1418～1450年)に禅譲し、李氏朝鮮王朝は最盛期を迎える。筆者の認識では、李氏朝鮮王朝の最盛期は世宗の孫＝成宗(在位1469～1494年)の代まで続いた(コラム63)。

14世紀後半～15世紀後半の中国と韓国は動乱後に安定した政権を樹立する。だが日本はちがう。

1392年に明德の和約が成立し、北朝と南朝が合体した後、室町幕府は安定した政権の樹立を目指す。しかし国法＝朱子学を輸入して明朝の六部体制や李氏朝鮮王朝の六曹体制に相当する「新体制」を構築する場面がない。したがって、将軍が絶対君主として君臨する場面もない。言い換えれば、奈良時代や平安時代の日本で仏教と律令制が根付かなかつたように、室町時代の日本で朱子学と絶対主義が根付かなかつた。

日本は1467年(あるいは1493年)から戦国時代に突入し、その後「旧世界」から「新世界」に変貌して江戸時代を迎えるが、鎌倉時代に和風化した仏教が普及したように、江戸時代に和風化した儒教＝儒学が普及する。だが、和風化した仏教が法として機能しなかつたように、和風化した儒教＝儒学が国法として機能する場面もなかつた。徳川家康が武家諸法度を制定して幕藩体制を構築し、徳川家光が鎖国と参勤交代を具現したが、将軍が絶対君主として君臨する場面は稀である。

余談であるが、筆者には明治憲法＝大日本帝国憲法も最高法規として機能したとは思えない。明治維新後の近代日本で和風化した「立憲主義」が成立した。政府は「解釈改憲」を繰り返し、昭和天皇の代に11条の統帥大権が突出する。他方、江戸時代の日本で米が物品貨幣として存在し続けたことを無視できない。筆者の認識では、近代日本を異質な帝国主義国家にしたのは立憲体制と経済空間の異質さであり、丸山眞男が論じた「超国家主義」などではない。

コラム61: 土木の変

1388年、アリクブケの末裔イエスデルがトグス・テムル(平宗)を殺害して北元の大カンに即位した。帝位がクビライ家からアリクブケ家に変遷したため、永楽帝は北元をタートル(韃靼)と呼びモンゴル高原西方のオイラト(瓦剌)部族を懐柔する。北元は東のタートルと西のオイラトに分裂した。そしてオイラトが明朝と朝貢貿易をはじめめる。

ペルシャ商人やアラビア商人がオイラトの朝貢貿易を利用した。明朝は朝貢使節の人員を50名に制限していたが、オイラトは制限を無視して1000名前後の使節を送る。彼らの大多数がペルシャ商人やアラビア商人であった(50名の制限は、皇帝に謁見できる使節の制限であったと思う。おそらく、他国も制限を無視して使節を送っていたが、1000名はあまりに多すぎる)。

オイラトは、ペルシャ商人やアラビア商人から仲介料を得ていたように思う。1448年、オイラトのカンに即位したエセンは4000名を越える使節を送り、また皇女との婚姻も要求する。明朝はオイラトへの下賜(すなわちオイラトとの交易量)を減らし、皇女との婚姻を拒否した。翌1449年、怒ったエセンはタートルの大カン=トクトア・フハと和解し、北京に侵攻する。明朝は応戦するが、オイラト軍に大敗する。そしてエセンが明朝皇帝=正統帝を捕縛する。歴史家たちは、これを「土木の変」と呼んでいる。

正統帝を捕縛したエセン率いるオイラト軍は北京近郊まで進軍する。そして正統帝の釈放を条件に多額の身代金を要求する。だが、廷臣の于謙が正統帝の弟=景泰帝を即位させ、エセンの要求を拒否する。オイラト軍は撤退し、翌1450年、エセンは朝貢貿易再開と引き換えに正統帝を釈放する。その後エセンはトクトア・フハを倒してタートルを支配し、北元の大カンに即位する。しかしエセンはテムジン=チンギス・カンの血脈と無縁である。1454年、エセンは殺害された。

他方、明朝では釈放された正統帝が軟禁され、景泰帝の代が続く。そして于謙が軍制改革を行い防衛体制を再構築する(明朝が「万里の長城」の建設をはじめたのは永楽帝の代であるが、本格化したのは景泰帝の代である)。しかし1457年、宮廷クーデタ(奪門の変)が勃発して于謙が処刑され、景泰帝も死去する。そして正統帝が復位する。復位後、正統帝は「天順帝」と称した。

コラム62: 陽明学

王陽明(王守仁)が科挙の試験に合格して官吏になったのは1499年で、明朝の最盛期=弘治帝の代である。しかし弘治帝は1505年に死去し、正徳帝(在位1505~1521年)が即位する。そして宦官劉瑾の専横がはじまる。

王陽明は劉瑾を非難する文を正徳帝に上奏したが、受け入れられず、龍場(現在の貴州省修文県。当時、貴州省修文県は未開の地であった)に左遷された。王陽明は龍場に約5年滞在し、陽明学を發明する(ちなみに、王陽明が書き残した書物は皆無に等しい。「伝習録」は彼の弟子たちが彼の言行を書き残した書物である)。

1510年、劉瑾の過大な負担要求に反発した安化王(北宋朝の末裔)が反乱を起こす。明軍が反乱を鎮圧したが、反乱に動揺した劉瑾が帝位篡奪を謀る。だが企てが露呈し、劉瑾は処刑された。その後劉瑾を非難した王陽明が復歸する。王陽明は県知事に昇進し、さらに巡撫や兵部尚書に昇進した。そして江西や江南の治安を担当する。

1519年、南昌(現在の江西省南昌市)で寧王(明の皇族)が挙兵し、南京に進軍する。寧王の進軍を察知した王陽明は南昌を奇襲し、慌てて帰還した寧王軍を破る。そして寧王を捕縛する。王陽明は1527年に広西(現在の広西チワン族自治区)で勃発した反乱も鎮圧し、1529年に死去する。

(寧王が挙兵した場面で、王陽明は民兵を組織し、商船を借用して南昌に向かった。王陽明の善政と人望がそれを可能にしたように思う。尚、正徳帝が自身を「將軍」に任命し、軍を率いて南京に進軍している。しかし王陽明が寧王を捕縛したため、寧王を釈放してから再度捕縛し、北京に連行して処刑した。正徳帝は1521年に死去するが、滑稽な皇帝であったと言うしかない。正徳帝の死後、傍系の嘉靖帝が即位し、約45年在位する)

14世紀後半のルネサンス運動以降、二元論がユーラシア大陸西部の支配的思想になるが、ユーラシア大陸東部も同様である。すなわち、ユーラシア大陸東部の支配的思想=朱子学は「理」と「気」の二元論である。しかしユーラシア大陸西部でもユーラシア大陸東部でも二元論を一元論に再編する試みがしばしば行われている。陽明学はそのひとつである。「知行合一」や「良知良能」、「文武両道」はまさに二元論の一元論化である。

(17世紀のオランダと18世紀のイギリスで優れた一元論が誕生している。たとえば、スピノザやヒュームの思想は一元論である。むろんスピノザもヒュームも国政に関与していたわけではないし、交易に従事していたわけでもない。しかし彼らの生活空間は帝国主義国家の生活空間であった。ヒュームは奴隷制を肯定したが、奴隷制廃止論者のアダム・スミスとの親交を深めた。海洋国家が一元論を発明したと論じる歴史家や社会学者がいるが、彼らは陸地の支配体制を海洋に拡大した国家が「海洋国家」とであると論じていない。当時のオランダとイギリスは陸地の支配体制を海洋に拡大した海洋国家で、「海洋帝国主義国家」であった)

東林党の活動等を除けば、陽明学が中国や韓国の歴史に大きな痕跡を残す場面はなかったが、近代日本の歴史に大きな痕跡を残す。大塩平八郎と吉田松陰、中江兆民はその典型であるが、高杉晋作や西郷隆盛、佐久間象山、河井継之助も陽明学を信奉していた。また、経済人の岩崎弥太郎や渋沢栄一、軍人の広瀬武雄や東郷平八郎、そして社会主義者(あるいは無政府主義者)の奥宮健之や幸徳秋水が陽明学を信奉していたようである(最近では、三島由紀夫と安岡正篤が陽明学を信奉している)。

ところで、中江藤樹が日本陽明学の始祖で、根底に孟子の性善説がある、と論じる哲学者や社会学者がいる。そして、日本の儒教＝儒学は孔子と孟子が同格であり、陽明学が近代日本の歴史に大きな痕跡を残したのはそのためである、と論じる場合がある。

だが、中江藤樹は江戸時代初期の人である。また陽明学の中心思想は「無善無悪」である。孟子と陽明学は一致しない。孟子の性善説と陽明学を重ね合わせる哲学者や社会学者たちは、幕末維新の英傑や明治の支配者層、知識人たちが善悪の彼岸を越えて何を見ようとしたかを論じない。

プラトンは三つのアイデアを論じた。すなわち、善のアイデアと真のアイデア、美のアイデアを論じた。戦争や革命は善のアイデアを隠蔽するが、善のアイデアを隠蔽すれば真のアイデアと美のアイデアが露呈する。幕末維新の英傑や明治の支配者層、知識人たちは、善のアイデアを隠蔽して真のアイデアを見ようとした。平たく言えば、「科学」を学ぼうとした。

だが、彼らの後継者たち、とりわけ昭和の高級軍人たちは美のアイデアを見ようとする。おそらく、明治末期に「転換」が生じた。それについては後述するが、幕末維新の英傑や明治の支配者層、知識人たちも日中十五年戦争や太平洋戦争の責めを負わなければならないとすれば、維新後も善のアイデアを隠蔽し続けたことにある。日清戦争は、やってはならない戦争であった。しかし反対した知識人(善のアイデアを露呈させた知識人。たとえば北村透谷)は稀である。

(真のアイデアと美のアイデアを露呈させた日本が、「善のアイデア」国になるのは第二次世界大戦後である。今の日本政府＝安倍内閣は、「美しい」国への「転換」を推進しているように見えるが、しかし国民の大多数は「美しい」国になることより「善い」国であり続けることを望んでいる。そしてプラトンも、最高のアイデアは善のアイデアである、と論じている)

ところで、南宋期に朱子学が誕生し、明朝期に陽明学が誕生したが、日本の戦国大名や武士たちは朱子学を学ぶことなくいきなり陽明学を学んだ可能性がある。

むろん室町時代に朱子学が日本の国法になる場面がなかったように、戦国時代に陽明学が日本の国法になる場面もなかったが、彼らの日本「陽明学」あるいは「無善無悪」が下克上を肯定し、さらに朝鮮侵略を肯定した可能性がある。

ちなみに、日本では豊臣秀吉がはじめた朝鮮侵略を「文禄の役」と「慶長の役」と呼んでいるが、韓国では「壬辰倭乱」と「丁酉倭乱」と呼んでいる。そして、慶長の役後の韓国で「丁卯胡乱」と「丙子胡乱」が勃発した。日本軍が撤退した後、後金軍＝清軍が李氏朝鮮に侵攻し、李氏朝鮮＝韓国を属国化する。

それでも李氏朝鮮王朝はしぶとく生き残り、大平の時代を築いた。筆者は、丁卯胡乱と丙子胡乱後に即位した孝宗(在位1649～1659年)から正祖(在位1752～1800年)までの李氏朝鮮王朝を最盛期の李氏朝鮮王朝より高く評価したい。同時代の日本も同様であるが、約150年の太平が民衆を豊かにした。余談であるが、韓流ドラマでしばしば登場する「イ・サン」は正祖である。同時代の江戸幕府将軍は徳川家斉で、松平定信が寛政の改革を実施している。

コラム63: 六曹(りくそう)体制

李氏朝鮮王朝は、太宗の代に明朝の六部体制を模倣して六曹体制を構築する。六曹体制は六部体制以上に「六省体制」と言える体制で、筆者は李氏朝鮮王朝の小中華主義の起源がそこにあると考える。

ところで、中国では、唐の太宗が歴代最高の名君とされているが、韓国では世宗が歴代最高の名君である。世宗はハングル(訓民正音)を考案したことで有名であるが、他方、本文で述べたように、李氏朝鮮王朝は世宗の代に最盛期を迎える。最盛期は成宗の代まで続き、六曹体制は概ね安定していた。成宗は絶対君主として君臨し、在野の有能な人材＝士林(サリム)を登用して六曹体制を強固にする。

成宗の死後、燕山君(ヨンサンゲン。在位1494～1506年)が即位する。燕山君は暴君であった。士林たちが反発し、士林たちの乱＝士禍(サファ)が勃発する。さらに軍の反乱も勃発し、燕山君は廃位され中宗(在位1506～1544年)が即位するが、筆者の認識では、燕山君の代から権力の腐敗がはじまる。中宗の代になっても腐敗が改まる場面がない。明朝も同じである。明朝も正徳帝の代から権力の腐敗がはじまり、嘉靖帝(在位1521～1566年)の代になっても改まる場面がない。

歴史家たちは、権力が腐敗した原因を宮廷内の争いや支配者層の争いに置き、他国との関係をあまり重視しない。だが、李氏朝鮮王朝も明朝も海禁政策を続けていた。そして中宗や嘉靖帝が在位した時期は大航海時代であり、16世紀後半から世界貿易がはじまる。しかし李氏朝鮮王朝も明朝も海禁政策を解除していない。筆者は、海禁政策が李氏朝鮮王朝と明朝の権力が腐敗した原因である、と考える。

海禁政策を廃止すれば、李氏朝鮮王朝が倭寇や女真族の侵入に苦しむ場面はなかった。明朝が倭寇や女真族、北元の侵入に苦しむ場面もなかった。そして宮廷内や支配者層に賄賂が蔓延る場面もなかった。

16世紀の倭寇は、日本人より韓国人や中国人のほうが多いが、彼らは密貿易をしたにすぎない。女真族や北元が侵入した目的も密貿易である。彼らが支配者層に賄賂を渡す場面がおそらくあった。賄賂は宮廷にも届く。海禁政策を解除すれば賄賂はなくなるが、海禁政策を解除するには六曹体制や六部体制を解体して新たな体制を構築する必要があった。しかし宮廷内の既得権益集団がそれを許さなかった。